

サムライアート・オンライン

龍拳

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ラストサムライ坂田銀時はある日、宇宙中で話題となっているSAOをプレイすることになる。

誰もが夢中になるゲーム、これはゲームであつても遊びではないとされたSAOの世界で銀時は驚愕することになる。

開発者、茅場昌彦によって告げられる最悪のシナリオ。

そのシナリオの裏に隠された真実と現実世界への自由を求めるため、そしてSAOで出会った大切な仲間たちを救うため侍、坂田銀時は剣を振るう。

目次

アインクラッド編

第1話	ゲームは一日1時間じゃ絶対足りない！	1
第2話	デスゲームだと？ 俺の人生は元々デスゲームみたい なもんだ！ ナメんなよ！	10
第3話	ゲームの攻略本を選ぶ時は慎重に	17
第4話	クソゲーボスの攻撃は初期から理不尽	28
第5話	満月の日に見る黒猫は縁起が悪い	40
第6話	ゴリラの学名はゴリラ・ゴリラ・ゴリラ	46
第7話	時には見た目で判断することも大事	50
第8話	私が面倒見るからとか言って最終的にお母さんが面倒 見ることになるんだよ！	58
第9話	ロリコンと思われたらフェミニストとでも言っておこ う	64
第10話	人間知られたくない事くらい一つや二つはあるもん だ	72
第11話	銀のニート侍 って誰かだ！	83
Episode of Argo		
section1	常闇に出会いし鼠と銀色の侍	90

アインクラッド編

第1話 ゲームは一日1時間じや絶対足りない！

最近テレビのニュースでひっきりなしに取り上げられている話がある。

SAOソードアート・オンラインというものらしい。

VRMMOだとかナーブギアだとか意味がよくわからない言葉ばかりが並ぶ。

まあ、俺には関係ない話だ。

と思う時期がこの俺、皆の大好き主人公銀さんにもありました。

今俺は江戸一番のカラクリ技師の源外のジーさんに呼び出されとある変なヘルメットみたいなもんを渡されていた。

ちなみに神楽と新八は万事屋で店番だ。

「ジーさん、いきなり呼び出されて来たと思っいたらいったいなんだよこれ」

「ああ、それはナーブギアっていつてな、まあ平たく言うとゲーム機だ。お前さんも知ってるだろSAO」

「ああ、なんか今すげー話題になってるやつだろ？ 確か今日が発売日だったよな。なんであんたがこんなの持ってんだよ」

「…… 実はそれを作った開発者とは知り合いでな、昔色々あってそれっきりだったんだが、少し気になってな……」

「あ？ ただのガキのゲームだろ、何をそんな気にする必要があんだよ」

「…… さあな」

はあ？ 意味がわからねえ。

俺がなんだそりやと聞こうとするとジーさんはいつになく難しい顔で言ってきた。

「アイツは天才だよ。俺が認める程のな。だが…… アイツは昔から少し…… 危険なところがあつた。だからちよつと嫌な予感がしてならねーんだよ」

ジーさんの声のトーンから本気だということはわかる。

けどやつぱりただのゲームじゃねーか。なにが危ないんだ？

「おい、銀の字。ちとこのゲームをプレイしてみてください」

「はあ？ 俺があ？」

「これはお願いじゃねえ。依頼、ちゃんとした仕事だ、報酬も支払う。

だから…… 頼む」

「……」

ちっ、らしくもなく真剣な顔しやがって……

しやーねーな！

「受けてやるよ、その依頼。ただしちゃんと報酬払えよな」

それに上手くいきやあ、ただ遊んで金が手に入るかもしれないねーからな。

「んじや、早速物は試しだ。被ってみてくれ」

「わーったよ。よっと」

俺はナーブギアとやらを被る。

「あ、そうだ銀の字、アカウントだとかゲーム内でのお前さんの姿を作れとか、くることになるだろうからその前に俺が教えてやる」

「え？ そんな面倒なの？」

「おいおい。すぐ遊べるもんじゃねーの、ゲームって。」

「いいから、よく聞け。まずなー」

俺はジーさんの説明を聞き今度こそナーブギアを作動させる。

すると目の前におかしな色や数字の羅列が表れる。

ウプ…… なんか気持ち悪い……

お、ゲーム内での姿を作れってか。ジーさんの言ってた通りだ。

姿は現実とそのまんまでいいんだよな。

ある程度の設定を済ませると目の前が輝きだす。

そして次の瞬間、俺の瞬間目の前にはなんとビックリ、巨大な西洋っぽい建造物が。

「うおっ!? まじかよ」

今まで俺はジーさんが根城にしてるきたねーカラクリだらけのところにいたはずだ。

それが周りを見渡すとおよそ江戸に似合わない西洋っぽい建造物が建ち並んでいる。

テレビで見た通り、いやそれ以上にリアルな光景だな……

これが全部作り物だなんて信じられねーな。

「にしてもこんな作るんだつたら18禁姉ちゃんにエロいことさせてくれるゲームでも作れよな……」

さて、どうするか。ジーさんからはとりあえず怪しいところがねーか調べてくれて言われたがどうすりゃいいんだよ。

とりあえず俺は町中を歩いていく。

しかし改めて見ても本当リアルだな。

見渡すかぎりキレイな姉ちゃんやイケメン面した男ばっかだな。でもこれ俺はともかく現実とは違うんだよなーコイツら。

あ、でもよく見ると獣人っぽい顔したやつもいるな。天人か？

こいつはジーさんから聞いた話だがSAOの開発者は俺と同じ地球人、人間らしいが売り場の中心は地球以外の同盟惑星だったんだよな。

でも結局人気の高さから地球でも売り出しを始めたらしいが。

まあ、とにかくそのせいか天人っぽい連中もケツコーいんな。

ツラの野郎が見たらどう思うか……ま、別にいいか。

そんな事を考えながら歩いている内に俺は、

「あれ、(どこどこ)？」

いつの間にか町の外、フィールドに出ていた。

しかも目の前には鋭い目をした猪が。

「つてヤベエエ!!」

猪がこつち突っ込んできた!

そうだ! 木刀でぶっ飛ばしてやる!

「あれ? ない!」

あ、そうか! これゲーム内だった。そりゃないわ。

「じゃねええええ!! 銀さん。ピーンチ!!」

ガッ。

あつ、転んだ。

俺は石につまづいたせいで顔面が地面に叩きつけられた。

「ああああ!!! 助けてえええ!!!」

俺が死を覚悟した瞬間。

俺を守るように目の前に立った男がいた。

男は剣を構え、

「ハアアア!!!」

と猪を切り裂いた。

うお、すげ。

「大丈夫か？ あんた」

男が手を差しのべてきた。

「ああ、助かったよ。ありがとな」

男の顔はなんつーかイケメンだった。

けど現実じゃ怪しいな。

「剣も出さずに逃げ回ってたら勝てるもんも勝てないぞ」

イケメンがいきなり説教を始めてくる。

えー、なんで俺起こられてんの。

俺がこの状況から脱つする方法を考えていると向こう側から「オー

イ、キリト!」と呼ぶ声がしてきた。

見ると赤毛の男がこっちに向かって走ってくる。

「いきなり走り出してどうしたんだよ……ん？ その銀髪の兄ちゃん
は？」

「悪いクライン。見たら殺られそうになってるプレイヤーがいたんで
助けに駆けつけたんだ」

イケメンはキリト、赤毛はクラインって名前みてーだな。

ま、とりあえずもっかい礼を言っとくか。

「あー、今回は本当に助かった。キリト…… でいいんだよな。あり
がとな、礼を言う」

「だから別にいいって。それよりもアンタ名前は？」

「え？ あ、ああ。俺は銀時ってんだ」

俺が自己紹介をするとキリトが握手を求めてくる。

後ろでクラインとかいうやつも、よろしくなと言ってきた。

「そうか、よろしく銀さん。よかったらこの世界での戦いかたを教えようか？」

「戦い方？」

「ああ、今丁度ここにいるクラインっていうんだが、コイツに戦いかたを教えていたんだ。どうせだったらついでに教えてやるけど……どうだ？」

戦い方…… か。別に俺はSAOを遊ぶ気はなかったんだけどな。

ジーさんの依頼もあるし。あ、でもこの世界を調べるんだったら戦い方ぐらい知ったほうがいいか。

「わかった。助けてもらってなんだが、よろしく頼むぜキリト」

「ああ！ ただし、わたし…… 俺の教え方は超厳しいからな、覚悟しろよ」

こうしてキリトによるSAOの戦い方講座が始まった。

◇

「おらああアアア!!」

『ギユピピピイイ!!』

俺が剣をふるうことによって切り裂かれイノシンは断末魔を上げた。

猪はそのまま青いポリゴン状態になって跡形もなく消し飛ぶ。

ふう。思ったよりもケツコー簡単だな。

これでいいのかキリトに聞こうと振り返ったらキリトとクラインが目を丸くして見ていた。

え、なんで？

「驚いたな…… 何も知らない初心者がスキルも使わずに倒すなんて」

「俺なんて結構ダメージ受けたんだぞ。それなのに銀さんは無傷ってどういうことだよ」

クラインが悔しそうにしているが…… なに？ どういうこと？

俺、普段通りに剣振り回しただけなんですけど。

「なあ、銀さん。もしかして剣術でも習ってた？ 侍の家系だとか」

キリトが唐突に聞いてくる。

まあ、確かにそうだ。

「ああ。俺はガキの頃に習ってたんだ」

「どうりで……なあ、聞きたいんだけどそれは剣術専門の道場なのか？　だとしたらその道場は今……どうなってる？」

キリトは妙に重々しい感じで聞いてくる。

「いや、別に剣術だけじゃねえ。いろんな事を教えてもらったよ。つっても今は……まあなくなっちゃったけどな」

「……！　そうか……それは悪いことを聞いた」

あれ？　なんか一気に空気が悪くなったんですけど。

これ俺のせいなの？　俺が悪いの？

俺がどうしようかと悩んでいるとクラインがこの空気に耐えられなくなったのか、話を切り替えてきた。

「そ、それにしても本当大胆な事を考えるよな、茅場昌彦は！」

茅場？　ああゲーム開発者の名前か。

「大胆な事？」

キリトが不思議そうにきく。

「いやだつてさ、魔法のないRPGだけ。戦うのに必要なのは己の力のみってな」

「なに、その三国志とか戦国時代で出てきそうなセリフ」

俺がツツコムとキリトが確かにと言って笑い出す。

お、空気が戻った。

クラインも安心したのか大口を開けて笑ってやがる。

「じゃあ銀さん！　今度はスキルもちゃんと使えるようにしよう！」

あ、まだやるのね。

◇

俺達がある程度モンスターを相手に戦う術を身につけていくうちに時刻は5時を過ぎていた。

仮想世界だつーのに、日まで沈むのか。何度も言うが本当にリアルだ。現実とそうかわりはない。

「腹減ったなく、そろそろ予約してたピザも届くしいったんログアウトすつか」

クラインが腹を撫でながら言った。

この世界でも飯は食えるが空腹感がまぎれるだけらしい。

あ、そういや俺、結局なんも調べてねーじゃん。

「二人共、今日はもう止めにするのか？」

キリトが剣を素振りしながら聞いてくる。

にしてもいい太刀筋だな……もしかしてキリトも剣術習ってたのか？

「ああ、でも飯食ったらまたログインするけどな。銀さんは？」

「俺か？ そうだな……俺はもうちよいやっつけてっかな」

ジーさんの依頼果たせてねーし。あ、でも新八達に報告すんの忘れてた。ま、いいや。

「だったらもつとビシバシやんないな！」

「うん。やっぱもう帰ろうかな！」

キリトの言ってることチンプンカンプンで俺にはわかんねーんだもん！

「ま、とりあえず俺はいったんログアウトすつから。愛しのピザが待ってるんでね！」

「ああ、じゃまた機会があれば！」

「おうよ！ 次はちゃんと礼もするぜ」

クラインとキリトが別れの握手をする。

これが青春ってやつか？ でもこいつら実年齢いくつだよ。

「じゃあな、キリト、銀さん！ ってあれ？」

クラインは空中にメニュー画面を開きログアウトしようとした。

だが、なにか問題があったらしい。

鳩が鼻くそ投げられたような顔してやがる。

「あん？ どうしたんだよ」

「いや、それがログアウトボタンがねーんだよ」

「ない？ そんなはずないだろ」

キリトが方眉を上げて言う。

「いや、本当にねーんだよ。キリトと銀さんもメニュー画面を見てみてくれ」

俺とキリトはメニュー画面を開いてみる。
するとマジでなかった。

「嘘おおい!! え、なにこれ俺もしかして帰れねーの、現実世界に!」

「お、落ちついて銀さん! こんなのだただのバグだ。すぐに治る」
「バグ?」

「ああ、すぐにでも運営側がなにかしらの対処をするだろう」
「ちよつと待ったあ!」

キリトの説明に安心したところにクライアントが青い顔で叫ぶ。

「な、なんだよ」

「いや、ピザ…… もう届いちやうじゃん」

俺はクライアントの股間を蹴り飛ばした。

「アダアアア!!! って…… 仮想世界だから痛くねーのか」

「たく、テメーは緊張感なさすぎだっつーの」

「だつてよく、ピザが〜」

クライアントが泣きそうな顔になっている。

するとそこにキリトが、

「なあ、二人共」

と妙に深刻そうな顔で言ってきた。

「うん?」

「思ったんだが、おかしくないか? ログアウトできないなんて運営側の今後にかかわることだろ。それにログアウトできないなら全プレイヤーを強制ログアウトすればいいのにする様子も見受けられない。それにアナウンスも流れないし」

キリトの言葉に俺もクライアントも黙りこむ。

確かにキリトの言う通りだ。

なんで運営側はなにもしやがらねーんだ?

いくらなんでも怪しい…… あ!

俺は思い出す。ジーさんの言葉を。

ー嫌な予感がしてならねーんだよ

まさか……！

その時だった。

リンゴーン、リンゴーン。

急に町の方から大聖堂のベルが鳴った。

すると俺達の体は光に包まれる。

「ええ!?… なにこれ、もしかして俺覚醒しちゃった!

燃えろ! 俺の何か! が発動しちゃった!? でもこれジビクト

リーバーサスじゃないよ! SAOだよ!」

「落ち着け銀さん! これは恐らくー」

キリトの言葉を最後まで聞くことなく、俺達はその場から消えた。

第2話 デスゲームだと？ 俺の人生は元々デスゲームみたいなもんだ！ ナメんなよ！

光に包まれた俺達は、最初にログインした町、始まりの町の広場にいた。

どういうことだ？ 強制的に場所を移されたのか？

周りを見ると他にも大勢のプレイヤー達がいる。

いったいどうなってんだ……

キリトにクラインも困惑しちまってるし。

おい、なんか変だぞ！ 上だ！

群衆の中の誰かがそう叫んだ。

言われた通り上を見ると上空が赤い変なロゴに埋め尽くされていく。

そしてそこからまるで血のようにドロリとしたものが流れてきた。

「うおお!? 何あれ、なんか、ドロドロしてんだけど!」

俺以外の奴等も全員驚いている。まあ、そりやそうだろう。

ドロドロしたやつは空中で固まっていき人の形になった。

「なんだありゃ？ なんかドラクエで見たことあるんすけど」

姿を現したのは顔がないフードを被った巨人だった。

これがなんなのか俺にはさっぱりだったが、キリトがその疑問に答えてくれるように言った。

「あれはGM、ゲームマスターだ」

「ゲームマスター、あれがか?」

俺がGMのいる上空を再び見るといきなり語りだしやがった。

『プレイヤーの諸君。ようこそ私の世界へ』

私の…… 世界だと。まさかコイツは……

『私は茅場昌彦。このSAOの世界の創造主でありこの世界を唯一操作できるものだ』

おいおい、まじか！ コイツがジーさんの言っていた開発者！

茅場の言葉に俺以外の勿論、キリトにクライン、その他のプレイ

ヤー達が驚きどよめく。

『プレイヤー諸君はもうお気づきであろうがメニューからは既にログアウトボタンが抹消されている。しかしそれはこのゲームの不具合ではない。繰り返し返す。これは不具合ではない。これこそがソードアート・オンライン本来の仕様である』

仕様だと、何言ってるやがるんだ。

「この世界からの自発的ログアウトは不可能となった。もし外部の人間の手によりナーブギアが外されるようなことがあれば、ナーブギアの信号素子が発する高出マイクロウェーブが諸君らの脳を破壊し、生命活動を停止させる」

んな!?

ど、どういうことだよ！ 嘘だろ！ ふざけんな！ セレモニーか、なんかか？ ありえねえ……

周りから次々に悲痛の叫び、疑念の声、怒声上がる。

『しかし残念なことに忠告を無視しナーブギアを無理矢理外した友人や家族によつて死んでしまった者達が地球だけで113人、他同盟惑星の天人プレイヤーは238人死亡している』

「な、378人も死んだのかよー！」

「銀さん、351人だ」

キリトに訂正された。いや、俺わかってたけどね！ ちよつと言いつ間違えたただだからね！

『ちなみにこの事は既にあらゆるメディアによつて報道されている。このことから諸君らのナーブギアが外されることはないだろう。なので君達は安心して攻略に励むことができる』

攻略？ まさかこのゲームをか？

『この世界を出る絶対条件はアインクラッド第百層まで攻略することだ。ただし、注意してほしいことがある。現時点においてあらゆる蘇生方法は存在しない。諸君らのライフポイントがゼロになったとき、諸君らの脳はナーブギアによつて破壊される』

俺は黙って聞いていたが、横でキリトが青ざめた顔で叫ぶ。

「百層だ?! そんなの無理に決まってるβテストの時だって二ヶ月

で六層まで行けなかったのよ…… あ、いや行けなかったんだぞ！」
βテスト？ なんだかよくわからねーがキリトの言う通り無理のある話だ。

『諸君らにあるプレゼントがある。アイテムレージを確認してくれ』

…… 仕方ねえ、今はテメエに従ってやる。

アイテム一覧に表示されていたもの、それは手鏡だった。

手鏡だと、こんなのどうしろってんだ。

手鏡を出して覗きこんでみると俺の身体が光りに包まれていく。

んだこりゃ!? また強制移動か？

俺はそう思ったが違った。

目を開けるとー

「…… なんもおきねー」

えー、なにこれ…… とんだ肩透かしだろー。

「なあ、キリト。なんかあったか…… って、えええ!?」

え!? 嘘どういうこと!? さっきまで俺の横にいたはずのキリト

が消えて黒髪の可愛い女がいる!

「ぎ、銀さん! そのこれは……!」

え? 俺のこと知ってるってことはやっぱりキリトオ!?

「おいおい! なんか皆、本当の姿に戻っちまってるぞ!…… って

あれ銀さんは変わんねーのか…… いや、まてその女の子はまさか

……!」

いきなりどつかの野武士みたいな奴がきた。

え? もしかして攘夷戦争で一緒に戦いました?

「クラインだよ! いや、それよりももっと重要なのはキリト!」

クラインに大声で呼ばれキリト? はビクツと体を震わせる。

「お、お前、女だったのか!」

「…… うん。ゴメン騙して……」

キリトは涙目で俺達を見つめてくる。

ちよっ! そんな目で見られたらなんか凄い心がいたたまれない

んですけど!

「いや、んなことは別にいい。それよりも今はあのフザケタGM野郎

だろ」

俺は茅場を指差す。

すると茅場はこの光景を見て満足しやがったのか最後の一言を言ってきたやがった。

「これにてチュートリアルは終了となる。ではプレイヤーの諸君。攻略に励んでくれたまえ」

チッ！ どうせなんにも出来ねーことは俺にもわかる。

けどこのまま黙ってられるかつーの！

「おい、こら茅場あー！」

『ムっ』

よし、反応しやがった。

「テメエ、さつきから中二くさいことペラペラ述べてなんのつもりだコラア！ 青春真つ盛り高校生気取りかこの野郎！」

茅場は俺の言葉に反応せずしばらく黙っている素振りを見せると、

「銀髪、天然パーマ、死んだ魚の様な目……」

と呟いた。

「ってコラアア!! テンメエ、なに返事したと思ったらいきなり人のコンプレックスを並べてきてんの!! いつとくけどな、俺は三次元には超人気なんだからな！ 毎回アンケート一位取ってんだぞコラアア!!」

「なに訳のわからないこと言ってるんだよ、落ち着けよ銀さん！」

クラインの野郎が俺をおさえてくる。

「離せ、野武士顔！ 俺はアイツを絶対殺す！」

「誰が野武士顔だ！」

『フ、フハハハ!!』

あん？ いきなり笑いだしやがったぞ茅場の野郎。

『私を殺したいか銀髪侍。ならば第百層に来るがいい。そうすれば私と会える。では諸君さらばだ』

それだけ言うと今度こそ茅場は消えた。

ん？ なんか今の茅場の言葉に変な違和感が…… なんだ？

俺がおかしな感覚にとらわれている間に広場は静寂に包まれていた。

だがそんな静寂も一瞬で壊れた。

ふざけるなよ！ 約束があるんだ！ こんなあり得ないだろ！
本当に俺達をこの世界に閉じ込める気か！ こんなこととして地球と天人との関係に亀裂が生じたらどうするつもりだ！ 帰してくれよ！

大勢のやつらが必死になって叫ぶが茅場はもう来ない。

茅場の野郎、本気みたいだな。

チツ、ジーさんの嫌な予感的中しちまった！

こんなことならちやんと調べておくべきだったか？ いや、例え調べたとしても俺に何かがわかるのか？

俺が考え込んでいるとキリトが俺の手を掴んできた。

「き、来て、銀さん！」

なんか妙に顔が赤かったが今はそんな事を気にしてる場合じゃねえな。

俺はクラインと共にキリトについていった。

喧騒が響く中を俺達は裏路地にまで走っていった。

裏路地につくとキリトが俺達二人を見て、

「これから私は、次の村に向かう。この世界で生き残るには自身を強化するしかないの！ 私ならモンスターと出会わずに安全に次の村へと行けるルートを知っている！ だから…… だから私と一緒に来て！」

キリト……

キリトの顔は必死だった。

この世界を生き残る覚悟を決めた目で俺達を見つめてくる。

俺が答える前にクラインが答える。

「ワリイキリト…… 俺はお前とは一緒には行けねえ。広場には俺の仲間がいるんだ。俺はそいつらを見捨てられねえ。だから俺の事は気にせず行ってくれ」

「そう…… わかった。でも…… 銀さんは？」

「……俺も行けねえ。実はもう少しこの町を調べておきてえんだ。それに俺はもう充分戦えるし。だからお前は自分の事だけを気にしてくれ」

「……！ うん、確かにクラインはともかく銀さんは強いもんね」
「俺はともかくつてどういいうこと!？」

「ああ…… フリーな」

「ううん！ 謝ることない！ 生きていたら…… 必ず…… 必ず、また会おう！」

「ああ、たりめーだ」

「お、俺も仲間達と強くなって生き残る！ だからキリト！ お前も頑張れよ！」

クラインの野郎、野武士顔のくせに言うじゃねーか。

「うん！」

キリトは前をむき走りだそうとした。

けどこのまま行かせるのも男として…… な。

「おい、キリト」

「ん？」

「なんで男の格好してたのか知らねーが…… お前、かなり可愛いじゃねーか。いい線行ってるぜ」

「なっ、か、可愛いって！」

キリトは顔を赤くしながら手をブンブン振り回す。

危な！

クラインなんか俺の後ろで笑ってるし。

キリトは息をハアーつとはき落ち着いたのか、

「私も…… そ、そういう銀さんの死んだ魚の様な目、嫌いじゃないよ！」

と言うと今度こそ走っていった。

頑張れよ…… キリト……

「じゃあ、銀さん、俺も行くよ仲間が待ってるから」

「そうか…… じゃあな野武…… クライン」

「別にいいけど最後まで俺の事、野武士顔って言うのな」

俺はクラインとも別れ、町の中を探りまわる。

さて、最初にログインされたこの町を調べりやなにか掴めるか？

それともジーさんがなんとかしてくれるか……

「とにかく動かねーことには何も始まらねえ」

俺は歩く、走る、この世界を生き残るため、また新八、神楽、最高

のバカ共に会うために！

第3話 ゲームの攻略本を選ぶ時は慎重に

SAOがデスゲームとなってしまってから一ヶ月の月日が流れた。その間に二千人は死んじまった。

が……誰も第一層を攻略できていなかった。

おかけで俺達は今もお、この第一層で生活している。

俺も攻略には参加していたがボスの部屋を見つけることもできねえ。

このままじゃ本当にこの世界で生きていくことになっちゃう。

「あーあー、ジャンプどうなってんのかなー」

早くジャンプの為に…… じゃない新八達を安心させる為に現実世界に帰らねーとな。

第一層、トールバーナにて俺はベンチに座り作り物の空を仰ぎ見ながらそんな事を考えていた。

「おーい、銀。攻略会議が始まるぞー！」

向こうから黒人のガタイのいい、なんか粉とか運んでそうなオッサンが俺を呼んでくる。

「へいへい、今行きますよーっと」

俺がオッサンの横に並んで歩くと厳つい顔で、

「おい、銀。お前今スゲー失礼なこと考えてなかったか？」

と言ってくる。おいおい心読まれてたよ。

「いや、なんも。ただチャカとかもってそうだなーと」

「考えてんじやねーか！」

おー、電光石火のツツコミ。

このオッサンはエギル。

同じジャンプ愛好家だったことがある時発覚し、以来フレンド登録もしてたまに会ったりしている。

「今回の攻略会議で重要な発表があるらしい。ちゃんと話聞いとけよ」

「わーってるよ、いちいち言わなくても。アンタは俺の親父かつつーの」

今回、初めて第一回攻略会議が行われる。

つつても何人集まるか…… まあ、殺られれば本当に死んじまうこの世界だし、しかたねーことだが。

「もう皆集まってるな、俺達はあそこに座るか」

俺とエギルは座る。

周りを見渡すと思つてたよりは多いな……

まあ。あくまでも思つてたよりはだから今生き残っているプレイヤーの数を考えればまだ少ないが。

ん？ あれは…… キリトじゃねーか！

離れた方で座っている黒髪の美少女キリトが見える。

見たところ一人みたいだな。

「おーい、キリトー！」

俺が呼ぶとキリトは一瞬ビクツと体を震わせたが俺を見ると安心したのか明るい顔になってこっちに来る。

「おいおい、なんだよあの可愛いらしいこは？ 銀のしりあいか？」

エギルのやつが驚いた顔で聞いてくる。

「ああ、ログインした時最初に出会ったやつだ」

俺がエギルにキリトの事を教えているとキリトが俺を前に来て、

「銀さん、生きてたんだね！ 良かった！」

と抱きついてきた。

ちよっ、いくらなんでも恥ずかしいんですけど！

周りの男達の冷たい目が突き刺さるんですけど！

「ほうほう、なるほどな」

エギルがニヤニヤと笑いながら見てくる。

え、なにその顔？ ウザイんですけど！

「本当に…… 良かった」

……！ キリトは泣いていた。俺の胸に顔を押しつけながら涙を流している。

「えーと、あのキリト。心配かけたようでも悪かったな。でも流石にそろそろ離れてくれない？」

「え…… あー、ごめん、いきなり！」

キリトは即座に俺の体から離れる。

泣きすぎたせいなのか知らないが顔、真っ赤じゃねえか。

その様子を見ていたエギルが唐突に、

「おー、俺もあそこに知り合いがー。ちょっと話してくっからー、今は二人でいろやー」

と何故か棒読みで言つて向こうに行つちまった。

なんだアイツ。

しかもエギルの野郎、グーサインをキリトに向けてきやがった。

いや本当になんの？

キリトが相変わらず顔を赤くしたままになっていると広場の中心にいた青髪の兄ちゃんが手を叩き会議開始の宣言をする。

「はーい！ では攻略会議を始めさせてもらいます！」

よく見ると結構なイケメンだな。この世界には珍しい。

「今日は俺の呼び掛けに応じてくれてどうもありがとう！ 俺の名前はディアベル、職業は気持ち的に侍をやらせてもらってまーす！」

ディアベルが自己紹介をすると緊張感でピリピリしていた奴等が笑いあう。

S A Oにはj o bシステムはねーぞ！ しかもこの廃刀令のご時世に侍はまーすいだろー。攘夷志士かー！

それぞれが笑みの混じった好意的な野次を飛ばす。

あーいう奴が指揮官に一番必要なタイプなんだよな。

つつても攘夷戦争時代の阪本もとい声のデカイ人はやりすぎでウザイがな。

全員の緊張が解れたのを見るとディアベルは爽やかな笑顔から一転、急に真剣な顔つきになる。

「実は俺のパーティがついにボスの部屋を見つけた」

ディアベルの言葉にその場の誰もがどよめいた。

「ついに……」

俺の横でさっきの様子とは違い真剣な表情でキリトは感心している。

「俺達の手でボスを倒し第二層への道を開く！ そして始まりの町で

待っている皆にこのゲームは必ずクリアできるということをわかってもらうんだ！」

ディアベルの熱いセリフに全員が、
「そうだ！ やってやる！ おうよ！ こんだけいりやボスなんてあつというまだ！」

といった感じに声援をディアベルに送る。

「よし！ じゃあまずは、次のボス戦に向けて5、6人でパーティを作ってみてくれ」

皆、それぞれの仲のいい連中で集まる。
「てことは俺は、」

「キリトと同じパーティか」

「え!?! いい……の?」

「あ? そんなの当たり前だろ? 俺達は仲間なんだからな」

「…… うん!」

よし、まずは一人だな。あとは…… もう他にはいなさそうだな。
エギルは戻ってこないし、ん?

見ると向こうの方でいつからいたのかフードを着込んだ恐らく女が座っていた。

キリトと同じように一人らしいな。

ちよつくら行ってみるか。

俺はキリトと一緒にフードの女の所に行く。

「おい、あんた」

俺の呼び掛けに驚いたのか、警戒しているのか女は立つと少し後ろにさがり、

「…… なに?」

と

聞いてくる。

「えーと、アンタはパーティ組まないのか?」

「別に…… 周りの人達は友達同士らしいし、全く関係のない私が混ぜたら邪魔だと思ったのよ」

「そうなのか。じゃあ良かったら俺達二人とパーティ組まないか?」

流石に二人だけはキツイし」

考えているのか暫く黙っていると女は、キリトの方を見て、

「私は別にいい。でもそちらの方は私が入って本当にいいのかしら？」

と言ってきた。

最初キリトはキョトンとしていたがまた顔を赤くして、

「か、構わないよ！ わ、私と銀さんは別にそんなじゃないから！」
手を振り回す。

ちよつ、危ない！ つーかこんな始まりの町で別れたときもあつたよな!？」

それとキリトはなんでこんな慌ててんだよ？

俺が困っていると女は、

「そう、じゃあいいわ。私もそのパーティーに入る。よろしく」とパーティーに入ることとなった。

「じゃあ、パーティー申請するから申請メールを送ってくれ」

メールが送られ俺はメニュー画面を開き申請ボタンを押した。

するとライフゲージと一緒に女の名前、《Asuna》と出てきた。

アスナつつーのか……

「皆、組み終わったようだし、じゃあ会議を『ちよつと、待ってんかあ!!』」

なんだ？

俺を含めたその場の全員が声のした方を振り向くと一人の男が階段を駆け降りディアベルの前にたつた。

なにあのサボテンみたいな頭。恥ずかしすぎるだろ。

「人のこと、言えないと思うわよ……」

アスナはボソツと呟いた。

「あれ!？」 声に出たあ？ つーか人のこと言えないってどういう意味だコラア！ 頭かあ、この天パのことを言いたいのか!？」

「そー！ ワイの話聞けや!？」

「うるせえ！ サボテンなんかより天パの方がいいもんね!？」

「なんの話や!」

「ぎ、銀さん、話聞こう」

キリトに言われちゃ、しかたねーか。

俺はとりあえず黙る。

「ワイはキバオウつてもんや。ボスと戦う前に言わせてもらいたいことがある」

「いったいなんだっつーんだ？」

「こん中に今まで死んでいった二千人にワビいれなアカン奴等がいるはずや!」

キバオウの言葉にキリトが一瞬ビクツと体を震わせる。

「なんだ? 顔色も少し悪いが……」

あ、ディアベルがキバオウとかいうやつに話かけてやがる。

「キバオウさん、君の言う奴等とはつまりも元βテスターの人達……」

「のこと、かな?」

「決まってるやないか!」

βテスター…… 最初は知らなかったがエギルに教えてもらった。

地球限定で行われたSAOのテストプレイをした奴等のことだ。

あ! そういや聞いてなかったがまさかキリトも……!」

俺がキリトを見ると、気づいたのか暗い顔で俺に対しコクリと頷く。

「それでさっきも……」

「β上がり共はこんクソーゲームが始まったその日にワイら初心者を見捨てて消えよった。奴等はうまい狩場やら簡単なクエストを一人じめして自分らだけポンポン強くなってその後もずつーと知らんぷりや! この場にβテスターがいるなら土下座して溜め込んだアイテムと金を吐き出してもわなあかん! パーティメンバーとして命あずかれんしな!」

「ま、確かにそういう奴等もいただろうな…… けど」

「銀さん……?」

立ち上がった俺にキリトが今にも泣きそうな声で俺の名を言う。

「おい、サボテン大王」

「誰がサボテン大王や！　こんの天パ大臣！」

「ああん！　テメエ天パをナメんなよ！　あの○泉さんだつて天パだぞコラア！　じゃない！　危うく話が脱線するところだった。おい、キバオウ、テメエは元βテスターが面倒見てやんなかったから死んだ。だから責任とれ、そういうことだな？」

「そ、そうや！」

「確かにテメエの言うことにも一理ある。けどなあ、いきなりデスゲーム始められていきなりライフポイントなくなったらマジで死ぬなんて聞かされたら誰だつてテンパるだろうが？　そんな精神状態で人のことまで気にしてられるか？　お前がもしβテスターだつたら他の奴等を助けていたか？」

「ムグ……　けど……」

「それでも納得いかねえのはわかる。けどよお、これを見てもんなことと言えるか？」

俺は本を出す。

道具やで無量配布されたこの世界の詳しいことが書かれている本だ。

「そ、その本がどうしたんや」

「コイツはβテスター共が書いたやつだ。これのおかげで俺は勿論、いろんな奴等、アンタも含めこれまで生き残ってこれたんだ」

「……」

「なのに、二千人は死んだ。たくさんの情報が手に入るこの本があつてもだ。つまりβテスターがプレイヤー達の死の原因じゃねえ。だから俺達が今すべきことはβテスターを突き詰めることじゃねえ。だこの死を踏まえ次に生かすことだ……　死んじまった奴等の分まで最後まで戦つて生き抜くことだ　！」

「……！」

キバオウを含め、全員が黙つて聞いていた。

するとキバオウは、

「まあ、アンさんの言う通りかもな……　騒がせて悪かったわ」と言い頭を下げる。

「いや、別にいい。お前の言い分も全部が間違いつてわけじゃねーしな」

キバオウが落ちついたのを見るとディアベルが今度こそと話を再開する。

「よし！ キバオウさんも納得してくれたみたいだし、会議を始めよう！」

こうして俺達は明日ボスとどう戦うか相談しあい解散した。

◇

攻略会議が終り夜になった頃、俺達はディアベルに誘われ飲み会を始めていた。

「明日の成功を願って…… 乾パ……」

「「「乾パ……」」」

そこらかしこからドンチャン騒ぎが始まる。

おいおい、酒でも飲んでじゃねーだろうなコイツら。

俺が食い歩いていると薄暗い小さな階段に座り固そうなパンをかじっているアスナがいた。

また、一人か……

キリトはエギルとなんか話てるようだしちよつと話かけてみるか。

「おい、アンタは皆と一緒に食わないのか？」

アスナは俺を見ると顔を反らしてから返事をする。

「特に仲がいい人はいないし。というか貴方は私なんかと話していいの？」

「あ？ どういう意味だ？」

「あの黒髪の人を放つといていいのかって聞いているの。貴方達はとも仲が良さそうだったし」

「そんな仲よく見えるか？……」

「あんな風に、だ、抱きつかれてる所を見たら誰だってそう思うわよ……」

なんか恥ずかしそうにボソボソ言ってるがよく聞こえん。

「えーと、言ってる意味がやっぱりよくわからねーが、今アイツは俺の

知り合いと話してるから別に大丈夫だぞ」

「…… はあ、なるほど貴方はそういうタイプなのね」

「え、なに？ どういうタイプ？」

「いや、別に。ハグ……」

アスナは再びパンをかじる。

けどそれあんま旨くねーんだよな…… あ、そうだ。

「なあ、これ使ってみるか？」

俺は一個のビンをアスナに渡す。

少し警戒する素振りを見せてくるが素直に受け取った。

男が怖いのか？

アスナがビンの上部に触ると指先が光る。

「それをパンにつけてみる」

アスナはパンに指で触る。するとクリームが出てくる。

「これは……！」

アスナはパンを一口食うと、自分の口に合ったのかガツガツと食いまくり 一気に食べ終える。

「うめえか？ そいつはな俺の特別な情報網で手に入れたもんだ。つーか二つ目の町でのクエストやりやあ手に入るがアンタもやるか？」

「いや、いい…… 私は美味しい物を食べるためにここまで来たんじゃない」

「この世界から出るためか？」

「それもあるけど、他にも理由はある。私が私でいるため。始まりの町で布団にくるまって腐っていくぐらいだったら最後まで戦ってこの命が尽きるまでこの世界に抗う。私はそう決めたの」

「そういうこと…… なんかアンタ俺に似てんな」
「え？」

「いや、俺もよお、昔そんな風に考えて世界を相手に無茶しまくってたんだよ。でも俺は結局……なんも守れなかったけどな」

って、俺はなんでこんなこと会ったばかりの女に話してんだ？

いけねえな感傷的になっちまってる。

「貴方…… もしかして侍？」

「ああ…… ってええ!?! なんてわかった！」

「命尽きるまで無茶するなんて侍ぐらいしか思いつかないわよ。それに世界を相手にとってことは貴方侍は侍でも攘夷戦争で戦った志士よね?。」

「…… まあ、そうだが」

「守れなかったって…… やっぱりたくさん死んだの?」

「……まあな。俺が救えずに死んじまった奴等がたくさんいたよ」

「そう…… だったら……」

「?」

「だったら明日は誰一人死なないよう頑張ればいいわ。最後まで戦争を生き抜いた貴方だからこそ…… できるはずよ」

アスナは相変わらず顔を背けて話しているが、もしかして

慰めを込めた激励か?

なんか気を使わしちまったな。

「まあ、お互い頑張ろうぜ」

「ええ……」

◇

うーん、銀さんと話がしたいけど…… 攻略会議の時、だ、抱きついちゃって恥ずかしくて…… 話せない!

飲み会が始まる前だってマトモに口が聞けなかったし……

私がそんなことを考えていると会議の時、最初に銀さんと一緒にいた、確かエギルさんが来る。

「よお、キリト…… でいいんだよな」

エギルさんは周りに聞こえないよう小声で、

「あの後、銀とはどうだ?」

と言ってきた。

ど、どうだっけどういふこと!?

「はあー、にしても銀も罪なやつだ。こんな娘に好かれるとはな」「ええ!?! わ、私は別にそんな風に思っていないよ!」

あ、いけない。おもわず大声で言っちゃった……

エギルさん、ビックリしてるし。

「えと驚かしてすいません」

「いや、いいんだ。俺もデリカシーがなかった。いい大人がいけねえな」

「いえ、そんなことは……」

「けどな、お嬢ちゃん」

エギルさんは周りに人がいないか確認してから言ってくる。

「これは一応だが…… アイツはああ見えて変にモテる。だからもし本当にアイツを好きだと思ったらすぐに行動に移らねーとやべーかな」

「だ、だからそんなことは…… ええ!? 銀さんモテるんですか!？」

「いや、ちよっ痛い!」

私は思わずエギルさんの首をつかんで聞いてしまう。

「ってどうして私はこんなに必死になってるの? 別に銀さんがモテても私には関係ないはず……」

ゴホゴホと咳をするエギルさんの横で私は変なモヤモヤ感にとらわれていた。

でも明日はボス戦、こんな気持ちでいたらダメだ!

私は頬をパンと叩き、気持ちを切り替えた。

第4話 クソゲーボスの攻撃は初期から理不尽

「おらあー！」

俺はスキルとか関係なしに剣を振りなんだかよくわかんねー形のモンスターを切り裂く。

『グギャアアア!!』

また、結構簡単に倒せたな。ま、所詮は第一層の雑魚モンか。

今、俺を含めた第一回攻略メンバー達は第一層・森のフィールド内を歩きボスの部屋を目指していた。

最前列にディアベルがいて最後尾は俺と両側にキリト、アスナだ。

A～F隊のパーティーで編成され、一番数の少ない俺のパーティーはボスに引っ付いているつつう小さな取り巻きルイン・コボルト・センチネルを倒す役割を受けおった。

にしても、なげーな。ボスの部屋はまだか……

俺が欠伸をしながら歩いていると横を歩くキリトが、

「ちよつと、銀さん。これからボス戦なんだからもう少し緊張感もつてよ」

と言ってくる。

つつてもなー。

俺が心の中でぐだっているとキリトが今回の戦い方についておさらいを始めだす。

「最初も言ったけど私達の相手は小さなルイン・コボルト・センチネルだからね。先走ってボスに向かわないでよ」

「へいへい」

「それから戦う時は私が敵のポールアックスをソードスキルではねあげさせるからささずスイッチして飛び込んで」

「わーっつたよ。でも俺スイッチとかそういう小細工苦手なんだよなー。っーか……」

俺はキリトの顔を見る。

するとキリトは何故か少し顔を赤らめ、

「な、なにっ？」

と少し緊張した感じで聞いてくる。

「いやー、なんかさあお前ってボスとかモンスター相手に戦う時つーか、バトルのことになるとなんか変わるよな」

「え?」

「いや、だからさあ、いつもは可愛い普通の子だが戦いとなると目の色が一気に変わる、みたいなの?」

「あー…… って可愛い!? 普段の私がってこと!」

うお!? なんかキリトの顔から一気に蒸気吹き出してきた! なんかヤバくね?

「い、いやまあ、そうだけど……」

「そ、そんな可愛いなんて……!」

キリトの奴なんか自分の両手指を絡めながらブツブツ言ってるけど、どうしちまつたんだ?

その光景を横で見えていたアスナが深く、はあーとため息をつくとき、「やっぱり仲いいじゃない……」

と俺に言うときつぽ向いちゃった。本当なんなんだ?

歩いて数時間、ついに俺達はボス部屋前に到達した。

ディアベルが扉の前に立ち激励の言葉をかける。

「聞いてくれ皆、俺から言うことはたった一つだ…… 勝とうぜ!」

「「「オオオオオオ!!」」」

全員やる気満々だな。

ディアベルが扉を開け、中に入っていく。

すると暗かった部屋が明るくなり奥の玉座に座る赤色の肌をした豚の様な姿をしたボスが俺達の目の前に立ちふさがった。

名前はイルファンク・ザ・コボルトロード

。左手に持つ巨大な斧が目立つ。

やっぱり実際に目にするのと怖いのか他の奴等の顔色はかなり悪い。

『グゴオオオ!!』

イルファンクが雄叫びを上げると奴の周りに小さな取り巻きルイン・コボルド・センチネルが数対現れ、こちらに向かってくる。

「攻撃開始!」

ディアベルも戦いの宣言をし、作戦通りに動く。

「A隊、スイッチ！ D隊さがれ！」

ディアベルの奴、なかなかの指揮だな。

上手く敵を翻弄しダメージを負わせている。

『ギョルオオオ!!』

おっとこつちも集中しねーと……な！

ズバツ！

『ギョオオ!!』

センチネルがポリゴン状態になって消えた。

たく、思ったより数多いな。

キリトは……

「えい！」

『ギョオオ!!』

大丈夫そうだな。つーかやっぱアイツバトルになると目の色変わるな。

アスナも大丈夫そうだ。いや、というより心配する方が無駄に思える位やるなアイツ。

なにより剣先が速い。俺レベルじゃなきや見えねーだろうな。

イルファングの4本はあったHPバーが一つに一本になり残り体力も半分のレッドゾーンに入っている。

するとイルファングは雄叫びを上げ、持っていた斧を投げ捨てる。ここまでは情報にあった通りだ。

全員で囲めば問題なく倒せる。

だが、次の瞬間、ディアベルが俺の予想に反した動きを見せた。

「全員さがれ！ 俺がやる！」

おいおい正気か？

「銀さん、ディアベルさんが！」

ん？ キリト？

あ……！

俺は即座に足を走らせた。ディアベルに向かって。

◇ どういうこと？

イルファングの体力ゲージがあともう少しというときにディアベルさんが皆を後ろにさげた？

まさか…… あれを狙って!?

私がディアベルさんの真意に気づいたからかこっちを見て覚悟を決めているというように笑みを見せた。

「銀さん！ ディアベルさんが！」

あとになって思った。どうして私が銀さんに助けを求めたのかわ分でもわからなかった。

行くなら気づいた本人が行けばいいのに。

でも何故か銀さんに呼びかけた。

もしこれが理由になるならば、たぶん私は銀さんならどんなピンチでもぶち壊してくれると思ったんだ。

◇

ディアベルがイルファングに飛び込んでいく。

斧を捨てたインファルグが使うのはタノワールだ。

キリトが事前にβテストの時のことを教えてくれていたんだが

……

『グゴオオオ!!』

その情報とは違いイルファングは巨大な野太刀を出している。

おいおいまじーだろ、これ！

イルファングからディアベルまで距離、3メートル、俺からディアベルまでの距離、大体4メートル。間に合うか？

いや、間に合うかじゃねえ。間に合わせるんだ！

ディアベルがイルファングに飛びかかろうとした瞬間インファルグは壁をまるで忍のように跳ね回り一瞬で間合いをディアベルにつめた。

いきなりのことに反応できずディアベルは、

「ぐわあああ!!」

切られてしまった。

ぐっ！ いや、だが体力はまだ残っている！

イルファングが最後の止めをさすためディアベルに野太刀を降り下ろす。

「させるかアアアア!!!」

ガキンっ!!!

『ブモモオオオ……!』

俺は刀でイルファングの攻撃を受け止める。

うおっ…… ただのデーターのくせに力強……

「あ、貴方は……」

苦しそうにディアベルが俺を見て驚く。

そりや本来後ろで戦ってる俺がここにいたらなあ。

『ブモモオオオ!!』

「グムムム!!!」

ちよっ！ コイツ本当力強い！ だか……

「テメエなんざにやられるかあああ!!!」

カギンッ!!!

『ブフモオ!?!』

力比べは俺の勝ちだこの野郎！

剣でイルファングの野太刀をはじいた。

たまらずイルファングはいつたん後ろにさがる。

「い、いまや！ 銀髪の兄ちゃん、ワイラが奴を引き付けるから兄ちゃん
はディアベルはんを頼む！」

キバオウがディアベルの代わりに指揮をとり敵に向かう。

「ディアベルさん！」

「このバカ野郎！ なんて無茶を！」

キリトとエギルはディアベルに駆け寄る。

「す、すまない」

ディアベルはキリトから回復アイテム、ポーションを受け取り飲みほす。すると体力は無事回復される。

「テメエ、ディアベル…… なんであんな真似しやがった」

最初ディアベルは口をつぐんでいたが暫くすると理由を話し始め

た

「ラストアタック……ボーナスのアイテムを手に入れるためだ」

「ラス…… なんだそれ？」

俺が聞くとディアベルの代わりにキリトが答える。

「ラストアタックボーナスは最後に止めを刺した人が手に入るレアアイテムのことだよ」

そんなシステムだったのか、知らなかった。

「攻略組はまだ作られたばかり、だから一個一個のパーティ間にも不和があつた……」

「……」

俺はディアベルの話を黙って聞く。

「実際、攻略会議の時のキバオウさんのようにまだ不満を持っている者はいる。だからリーダーである俺がアイテムを手に入れて適材する人物に渡すつもりだったんだ。そうすれば不和も少しは和らぐ。そう考えていたんだ」

「…… それで、テメエの命、捨てるような真似をしたと」

「貴方の言いたいことはわかる…… それでもリーダーとして例え命を捨てるような行為だったとしても俺がやらなきゃいけないんだ」

「ふざけんじゃねえよ」

「え……」

「ぎ、銀さん？」

「銀……！」

「リーダーとして命捨てるような行為でもやらなきゃいけないだ？

アホかテメエは。グダグダ意味不明な言葉並べやがって、誰もお前をリーダーなんて思ってねえよ！ 誰もお前一人にそんな重みおわせてなんかいないんだよ！」

「……」

「ここにいる連中は、お前一人に責任おわせる気も命かけさせる気もねーんだよ！ ただ仲間として、テメエと一緒にここまで来てんだ！

だからテメエ一人で突っ走ってんじゃねえ！」

「！…… すまない……」

ディアベルは頭をさげた。
が、

「許せねえな」

「え？」

「許してほしかったらテメエはあとは休んでろ。あの豚は俺が潰す」

俺の言葉にディアベルはわかったと少し頬を緩めながら言った。
キリトにエギルもヤレヤレとか言ってる。

「よし！ 行くか！」

剣を構える。見るとイルフアングの体力はさつきとあまり変わっていない。

死者は出ていないが防戦一方のようだ。

アイツは体が固い。並み半端な攻撃じゃ通用しねえ。

俺が行こうとすると横にいつからいたのか立っていたアスナが言う。
う。

「やっぱり私の言う通りだったでしょ……」

「どういうことだ？」

「守れたじゃない。仲間」

「！…… ああ」

「貴方が好かれる理由もわかった」

「え？なに？」

「いや、別に……」

いけね、ちよつと話しすぎた。

キリトとエギルはもう加勢してるし。

「ディアベル！ お前の失敗は俺達が挽回する！ 目指すはラスクア
タッチメントボウナスだ！」

「それを言うならラストアタックボーナスよ……」

アスナが冷めた声でツッコんだ。

わかってるよ！ 少しボケただけなの！ いつもだったらメガネ
がウザいばりのツッコミするから少し調子が狂いました！

「ほんじゃまあ、行くか！」

「ええ！」

俺の後ろをアスナが走る。

まずい、少しずつたがアイツらイルファングにおされてる。

だが、絶対誰一人死なせはしねえ！

「おらアア!!」

イルファングに剣で切りつける。

「ゴガアア!!!」

体力は今だ0にはならないがイルファングはたまらず後ろに仰け反る。

今だ！

「アスナっ、スイッチ！」

「ええー！ はあああー！」

スイッチで交代し今度はアスナがイルファングのデカ腹に剣で切りさいた。

しかしイルファングは倒れそうになったところを踏み込み、野太刀をアスナに向けた。

「アスナ、避ける！」

「くっ……」

アスナはギリギリ紙一重で攻撃をかわしたが、着ていたフードが野太刀に切り裂かれる。

すると今までお目にかかれなかったアスナの顔がついに拝めた。

驚いた…… アスナは美人だった。もうそれ以外言いようのないほどの。

その姿に誰もが息を飲んでいった。

「何ボーツとしてるの！」

「っ！ わーってるよ！」

アスナと共に再びインファルグの懐に飛び込む、イルファングは即座に叩ツ斬ろうとするが無駄だ。

所詮はデーター、戦う内に相手のパターンが読める。

俺は左、右と攻撃をかわしつつ剣で斬っていく。

アスナも、同様持ち前の素早さで敵を翻弄している。

このまま一気に終わらせる！

◇ 「ふ、二人とも凄い……」

銀さんはともかくアスナさんもあんなに強いだなんて……

私も元βテスタターだし自分の実力にも自信はあるのだけれど、なんだか二人の間に入る余地が見つからない……！

他の皆も啞然としてしまっているし。

「でも私も戦わなきゃ！」

もう弱い自分は嫌だ。

今度こそ戦うんだ。私は、大切な物を守るために！

◇ 「どおらア!!」

『ブモモガアア!!』

うし、あと少し！

俺がいったんさがるとアスナが前に出る。

「とどめよ！」

アスナが剣先を突きつけようとした瞬間だった。

イルフアングが大きく上へと跳ねた。

「なっ?」

空振りしたアスナは前に倒れこむ。

アスナは即座に立ち上がるが着地したイルフアングが殺気の込めた野太刀を横から切りだした。

「あ……い！」

「アスナあー！」

ガキンっ！

うごおっ!? 上から止めるのと横からデカイ剣止めるのじゃ全然ちげえ！

普通の奴ならぶっ飛ばされるだろうが俺は、

「フギギギ!!!」

足を限界まで踏み込み踏ん張る。

「ちよつと、無茶しないで！」

「いいから、コイツからいったん離れろ！」

ディアベルを助けた時のようにまた返り討ちにしてやる、かと思っただがコイツさつきよりも力倍増してやがる！

なかなか、はじきかえせねえ。

俺が動けないでいると、イルファングの頭上に人影が。

あれは……！！

「はああああ!!!」

「キリト！」

ズバツ！

『ブモモオオ!!!?』

いきなり上から斬られたイルファングはたまらず後方にさがる。

「銀さん、アスナさん、今だよ！」

「おう！」

俺とアスナは今度こそ決着をつけるため走り出す。

「私も最後まで戦う！」

「来るのはいいが…… 死ぬなよ！」

「当たり前よ！」

インファルグの持つ野太刀が構える。

来たところを返り討ちにする気か！

『ブモモオオ!!!』

だが、そう簡単にいくかよ！

「とおっ！」

俺はイルファングが振った野太刀の上に乗る。

そのままイルファングの顔面にまで迫り、

「ドオラアアアアア!!!」

一気に足元まで切り裂いた。

「はああアア!!!」

切られ足取りが悪くなったイルファングをアスナも下から一気に上へと切り上げていく。

『ブ……モオオ……』

これで……

「止めだ！ オラアアア！！！」

ズバツ！

『ブモモオオオオオオオオオ！！！！』

イルフアングは最後の断末魔を上げ、消滅した。

《Congratu Latitions》

「……か、勝ったああああ！！！！」

攻略組初のボス戦は死亡者ゼロで幕を閉じた。

◇

「じゃ……俺が貰っていいんだな？」

俺はディアベルを始めとした全員からは是非、つか絶対受け取れという顔をされ、ラストアタックボーナスのレアアイテムの主優権を得た。

出てきたのはコート、名前はコート・オブ・デビルホワイト？

取り合えず着てみるか……

アイテムレージから今まで着ていた防具とチェンジする。

「……おお……」

周りから関心めいた声があがる。

なんだよ……

俺が着たコートは名前の通り真っ白で一部銀色のラインが描かれている。

「銀さん、格好いいよー！」

キリトが顔を赤らめながら言ってくる。

あれ、なんだろうちよつと恥ずかしい……

俺がエギルやらキバオウやらに絡まれているとアスナが一人、ボスの部屋を出ていこうとするのが見える。

「おいー！ もう帰るのか？」

アスナは俺の方を向き、

「ボスは倒したし、もう用はないでしょ。それにフードがないと不安

なのよ……」

「ただ人見知りなんだよ。いや、男が怖いからか？ まあ結構美人だったしな。」

「それに…… 貴方にはその子がいるようだし…… 私みたいなのは帰ったほうがいいでしょ」

「はあ？」

アスナはキリトの方を見たようだが…… どういう意味だよ？

キリトの奴、顔を抑えて疼くまったやったし。

「待てよ」

「なに？」

「また、いつか機会が会ったら一緒にやろうぜ。あんたとは一番相性よさそうだ」

「……！」

え？ なに？ なんかアスナの顔がキリトのように真っ赤に……

！

しかも周りにいた奴等が、全員口を抑えて笑い堪えてるんですけど。

キリトにいたってはなんか不機嫌そうな顔で俺を睨んでくるんですけど!?

俺、変なこと言いました!?

「き、機会が会ったら考えておくわ！」

アスナはそう言うときっさきと帰っていつちまった。

その後始まりの町にいったん戻った俺達だったがキリトに口を聞いてもらえなかった。

なんで？

第5話 満月の日に見る黒猫は縁起が悪い

第一層を攻略してから月日が流れ今私達攻略組は、第三層まで攻略に成功した。

私はレベル上げのため一人第三層のフィールドでレベル上げにいそしんでいる訳だけど……

「寂しい……」

最近私はずっと一人だった。

このSAOの世界は女性も少ないし、男の人からなんだか妙な目で見られるから嫌なんだよね。

だから私はソロでやり続けているんだけど、どうせだったら銀さんに会いにいけばよかったかなー。でも銀さんっていつたい何処にいるんだか全然わからないし、第二層攻略の時もアスナさんと一緒にいるのを見ると話しかけることもできなかった。まあ、銀さんから呼び掛けてくれたけど…… 逃げっっちゃったし。

第一層ボス攻略のあと銀さんがアスナさんに言った一言が何故か私の胸を、なんというかチクチクさせていた。

銀さんを見てると胸がモヤモヤするし、話しかけるきになれなかったんだよね……

嫌われてると勘違いされてなければいいんだけど。

あらかたモンスターを倒した私は疲れを癒すためそこら辺にあった小さな岩に座る。

多少ゴツゴツ感はあるけどまあ、いいか。

「はあー……」

一気に今までの不満を吐き出すかのように私の口から息が排出される。

「大丈夫？」

「うん、まあ…… って誰?！」

いつの間にか私の目の前に顔を除きこむように見てくる人がいた。

黒髪セミロングの可愛い女の子だった。

「ご、ごめんね、驚かせて。なんだか暗い顔をしてたから」

「あ、いや、こちらこそ変に心配をかけてすみません！　少し悩み事があつて……」

「悩み事？」

「ええ、まあ」

女の人は岩の横に体育座りしてと話すためかやや、顔を上げる。

「私、サチつて言うんだけど良かったら話聞くとよ。本音を言うคนเดียวでいるのが不安だからだけど……」

確かにここはフィールドだし注意しなきゃ危険だろうけど、だったらなんで一人で来てるのだろうか？

もしかして他にもいるのかな？

「あの、もしかして仲間の人とはぐれたんですか？」

「う、うん。実はレベル上げに来てただけど怖くてについ逃げつちやつてそしたらいつの間にか皆と……　うう……」

サチさんは目にうっすらと涙を浮かべ始める。

「わわっ！　あの私が一緒にいますから！　それに私も誰かに相談をしたいと思つてましたし」

相談したいというのは本当だ。

誰でもいいからこの不安を聞いてほしかった

「ごめんね。逆に気を使わせたみたいで」

「いえ、いいんです。話を聞いてほしいのは本当ですから。あ、私キリトつていいいます」

「うん、よろしくねキリト」

これが私とサチさんとの出会いだった。

◇

「う、うまい……」

おつすオラ悟空！　じゃない皆が大好き主人公銀さんだ。

最近ツツコミ役のダメガネがないせいで調子狂いつぱなしの俺は気分を癒すためとある情報屋から聞いた旨いスイーツが食えるという店で食事をしていた。

それにしても旨いぜこのチョコレートパフェ。なんかバナナっぱ

い果物がアイスっぽいもんといいアクセントを出している。

俺が心中でグルメリポートをしていると、ふと視界に懐かしの姿が目に入る。

あれは……

「キリト？」

見ると向こう側の席の方でセミロングの女と話しているようだった。

するとセミロングの女が俺に気づき、キリトになにか言うときリトが真っ赤な顔になってこつちに来る。

「ひ、久しぶり銀さん」

すげー声震えてるんですけど。大丈夫か？

キリトが真っ赤になったまま黙りこんでいるとセミロングの女が苦笑いを浮かべながらこつちに来る。

「えーと、貴方が銀時さんですね」

「ああそうだが…… アンタは？」

「私、サチつていいいます。キリトの友達です」

おおー、キリトの奴いつも一人だと思っていたが、ちゃんと女の友達ができたのか。

「銀さんのことはキリトからよく、聞いています。良かったら私達のギルドにご招待しますけど、どうですか？」

「ギルド？ キリト、お前ソロプレイは止めてギルドに入ったのか？」

「…… ふ、あー」

「いやなにその反応!？」

何故かキリトは餌を待つ金魚のように口をパクパクさせている。

それを見かねたのかサチが慌てて説明を始める。

「あー、キリトは基本ソロだけどよく私のギルドといっしょに行動するんです」

「あー、そうなのか」

俺が納得したのを見た二人は急に背を向けこそこそと話し出す。

「ダメだよキリト、ちゃんと会話しなきゃ。今のだって本当は銀さんと二人だけのパーティー組みたいから今もソロをやり続けてたって言

うはずだったのに」

「うー、だって久しぶりだから、なんか緊張しちゃって……」

「おーい、お前らなにこそこそ話してんの？」

「なんでもない！」

うお!? 見事にハモった。

その後俺は無言を言わずにサチのいるギルドとやりに連れていかれた。

◇

第三層、町ミルバラの酒場、そこがサチが入っているというギルド、月夜の黒猫団が溜まり場になっているところだった。

ギルドといっても六人だけの小規模ギルドで定まった場所を作らずこうしてこの酒場を中心に活動をしているらしい。

俺の歓迎会ということで多くの料理がテーブルに並べられそれを中心に月夜の黒猫団が立っている。

その中の一人が自己紹介をする。

「初めまして銀さん。俺はケイタ。このギルドの参謀長をやらせてもらってる」

「参謀長？ マスターじゃないのか？ つーか六人って聞いてたがキリトを外すと五人しかいねーぞ」

「あ、そういえばマスターは？」

ケイタはサチや他の連中に聞くが全員、

「「「知らね」」」

と答えた。

マスター不在か…… ん？

なんか机の下から気配が……

恐る恐る机の下を見てみる。

そこにいたのは、

「酒場でずっとスタンバってました」

体育座りをしたウザイ長髪の男、ツラだった。

「いや、なんでお前がいんだあアアアアア!!!」

俺は、必殺の拳をツラの顔面にくらしメリメリと音をたたせぶつ飛ばした。

その光景を見た月夜の黒猫団達が、

「「「マ、マスター!?」「」」」

と叫んだ。

いや……こ、こいつがあアアア!?

今、俺の目の前に倒れているのは、かつて攘夷戦争で共に戦った男。狂乱の貴公子桂小太郎と呼ばれた攘夷志士が、実体はただのバカ。それがなんでS A Oの世界にいて、しかもギルドマスターやっつてんだよ!

「き、銀さん、いきなり何してるの!?!」

キリトは慌てているが……

ツラはすぐに起き上がる。

「久しぶりだな銀時、いやーまさかこんなところで会えるとな」

「それはこっちのセリフだ! テメエなんでこんな所にいんだよ!」

「ええ! フルーツと知り合いなんですか銀さん!?!」

ケイタが驚きの声を上げるが、フルーツってなに!?

その疑問にツラが答える。

「銀時、ここでの俺の名はフルーツポンチ侍Gだ。覚えておけ」

「知らねーよ! なにがフルーツポンチだ! 今さら原作ネタ使ったくんじゃねえ! つーかなんでお前がS A Oにいんだ! なんて攘夷志士がゲームで遊んでんだ!」

「ふっ、今の世の流れを知るのも攘夷志士の役目。なんでもファミコンがツインファミコンになって帰ってくるときいていてもたってもいられずでな」

「いや、違げーよ! これファミコンじゃねーよ! 全く流れについてこれてねーだろうが!」

「銀さん、落ちついて! フルーツさんは凄いでズレてる所があるから!」

キリトが俺をおさってくるが、我慢ならねえ! コイツ凄いぶん殴りたい!

「だいたいテメエ、第一層攻略の時何してやがった！ まさかおじけついで隠れてたんじゃねーだろうな！」

「武士を愚弄するな銀時。俺は第一層ボス攻略の時……」

イルファング・ザ・コボルトのいるボス部屋にてー

「イルファングの玉座の後ろでずっとスタンバってました」

「じゃねえーだろおオオオオオ!!!! なんでお前ボス部屋にまでスタンバってんだアア!!」

「いや、実はお前達が来たら共に戦おうと思っていたのだがセンチネルとのUNOが白熱してしまっただけ」

「いやUNOってなんだあ！ お前なんで敵キャラと遊んでんの！ なんでそんなシステムの壁をぶち壊すようなことできるの！」

「苦しい戦い…… だった。クツ！」

「クツ、じゃねエエエエエ!!!!」

その後、危うくヅラを半殺ししかけた俺をキリトを含めた月夜の黒猫団が止めた。

「次回、ついに江戸の夜明が……」

「来るかアアアア!!!!」

第6話 ゴリラの学名はゴリラ・ゴリラ・ゴリラ

前回ツラを半殺しにしそうになった俺だったが、キリトに止められ
なんとか落ち着いた。

「たく…… ツラ、お前ボス攻略は来なくていいからな。お前来たら
なんか世界観壊されそうだし」

「何を言う。俺ならドロ―2でセンチネル三体はいけるぞ」

「UNOから離れるお!」

俺がツツコンでいるとキリトが宥める。

「まあまあ、それよりも銀さん、ちよつと協力してほしいクエストがあ
るんだけど」

「クエスト?」

俺が聞くとサチが赤い宝石の様な物を出す。

照明に当たると反射し赤い光が灯る。

いかにもゲームっぽいアイテムだな。

「これはたまたま隠しクエストでてに入れたアイテムんだけど、こ
れを使うと隠しボスと戦えるらしいんです」

「隠しボスって、そんなのあんのか?」

「うん。私もβテストの時も別のクエストではあるけど隠しボスとは
戦ったよ」

キリトは興奮気味に言う。本当バトルになると目の色が変わるよ
なコイツ。

「んで、その隠しボスを倒すつもりなのかお前ら」

「はい、狙いはボスを倒して手に入るアイテムです。俺達月夜の黒猫
団は経験値、キリトにはボスを倒して手に入るレアアイテムの装備で
す」

「そして、メガドライブも手に入れるぞ銀時」

「手に入れねえし、ねーよそんなの!」

「銀さん」

キリトが俺の前に立ち真剣な眼差しで見つめてくる。

「私と…… 一緒に戦ってくれる?」

はあー、そんなもん……

「決まってるだろ。やるぞ一緒に」

キリトは一瞬固まったが、顔の色が普通の肌色から一気に赤へと変わり、

「あ、ありがとうー！」

と言って逃げてしまった。

いや、なんで？

その後これを見たサチ達はよくやったとキリトに言っていたらしい。

◇

隠しボス攻略は一週間後となった。

月夜の黒猫団とのドンチャン騒ぎを終えた俺は街灯が頼りの暗い町の中、ベンチに座る情報屋から隠しボスの情報を聞いていた。

「で、聞きたいことってのはなんだイ？」

フードを着こんで話すのは、男みたいな口調で喋る女、アルゴ。情報屋で鼠のアルゴと呼ばれている。

「今度隠しボスと戦うことになってな。ソイツの戦い方とか知ってたから教えてくれ」

「…… そりゃまア、この層の隠しボスのことなら知ってる。けど君…… 金持ってるの力」

アルゴがフードごしに睨んでくる。相変わらずこえーな。

「いや、ほら金は…… あれだよ昔のよしみで」

「じゃあーなアー」

アルゴはそう言うのと去っていった。

「いや、ちよつと待ってエエ!!頼む! ツケで! ツケでお願いします!」

こっちは恥も外聞も捨てて足にしがみついていたぞ!

少しは頼みを聞いてくれ!

「はあーしょうがないネ。ギー君には昔助けられたこともあるし、今回だけだゾ」

「あーすまねえ」

「じゃあネ、まずはボスの名前だけど……」

相変わらず凄い情報力だ。

キリトでも知らないことをコイツは知っている。

コイツと日常会話をしているだけで100コル分のネタが盗まれるとか言われているが、あながち間違いじゃないだろう。

だがまあ、コイツの正体を知ったら納得できるだろうな。コイツのあり得ないほどの情報收拾能力を。

鼠のアルゴ、その正体はあの変態ストーリーカードM女と同じ忍者。つってもお庭番衆とかじゃない、抜け忍だが。

攘夷戦争時代に他の忍から逃げてる所を俺が助けたわけだ。

まさかこのSAOにいるとは驚きだったがな。

アルゴいわく例えゲームといえどどんな情報も知りたいからプレイしたらしい。

ちなみに年齢は……全くの謎だ。どんなに金を積まれてもそれだけは教えてくれないらしい。

「まあ、ある程度は教えたヨ。ちゃんと金は払えヨ」

「わーってるよ、ちゃんと今度払うから。あ、そーいやヅラもいるって知ってたか？」

「勿論知ってるヨ。でもオレツちヅラはバカ杉以上に苦手だからな。会おうとは思わない」

バカ杉…… アルゴは高杉の事がとんでもなく嫌いだ。昔から理由は知らないが高杉のことを本当に嫌っている。

紅桜の件も知っていたらしいく、余計に嫌いになったらしい。

「ギー君だけだヨ、オイラが心を開くのは」

「心お？ お前がか？ 金払わなきゃ、何も教えねーくせによく言うぜ」

「…… 普通、こんな事言われたら気づくだろうーガ」

「何がだ？」

俺が聞くと、アルゴはさっさとその場から離れ背を向けたまま、「金払わなきゃ教えないネ。バーカ」

と言って暗闇の中を消えていった。

◇

一週間後。

俺達は隠しボスがいるという第三層、朝露の森というフィールドを歩いていた。

「おい、まだかよ隠しボスは」

「うーん、ここら辺だと思っただんですけど……どこだったかな……」

ケイタが汗を浮かべながら言っているが、大丈夫かよ。

俺が心配しているとサチが叫んだ。

「うわっ！ ゴリラ型のモンスターが出た！」

見ると霧がかかってよく見えないが木の間に影が見えた。

確かになんかいんな。

「サチ下がって！ でやあアアア!!」

キリトが影に向かって剣を振りかざした。

「ちよっ、ちよっと待って！」

「えっ、と、止めた!? いや、それよりもゴリラが喋った!?」

真剣白刀取りでキリトの剣を止めたのはゴリラ…… いや、コイツ

は……!

「俺、ゴリラじゃないから！」

「真撰組の近藤おオオオオ!」

また、知りあいかよオオオオ!!!

第7話 時には見た目で判断することも大事

「テメエ、ゴリラ！ なんでいんだ！」

今俺の目の前にいるゴリラは江戸の武装警察真選組の局長、近藤勲。

本来ならば恐らく現実世界でSAO事件解決の為に茅場の足取りでも追ってるか攘夷浪士とでも決死の戦いに挑んでいるだろう。

それがなんでSAOにいやがる。なんで俺の知り合いがこんなにも多く出てくるんだ。

「それはこっちのセリフだぞ！ はっ！ ま、まさかお前も白ウサギについていけとかいうメールを受けてトリニティとか言う女に連れてこられたのかああ?！」

「いや、違げーよおお!! なんかお前だけマトリックス的な別件に巻き込まれてただけどお!!」

つー前にも二回くらいあったぞ、こんなもの！

「き、貴様は近藤?! 貴様もこのツインファミコンの世界にいたのか!」

「な、か、桂!? お、お前も反乱を起こしたコンピューターと戦う為に来たのか!」

「いや、お前ら、どっち共ズレまくってんだろぅがあ! いい加減にしてくんない! お前らマジでこのSAOの世界から消えてんない!」

俺はツツコムがこのアホ共は話を聞かない。それどころか勝手に話を進める。

「そうか…… 近藤、お前も俺と同じファミコン愛好会だったか。ならば話は別だな。共に戦うぞ!」

「そうか…… 桂、お前も俺と同じく人間の自由を勝ち取るために戦っているんだな。なら話は別だ! 昔の事は忘れて一緒に戦おう!」

二人は固い握手を交わした。

「いや、お前ら、全くわかりあえてないからな! 全然関係ねーからな!」

「よかったな…… フルーツポンチ侍G……！」
ケイタ達は泣いていた。
「なんで、感動してんの!？」

◇

結局ゴリラを含め九人のパーティで霧が充満している森を探索している巨大な2メートルはありそうな人の影が見えた。

少し身構え様子を見るが動く様子がない。

ここは……

「行ってこいゴリラ」

「ええ俺!？」

ゴリラは驚いているが他の奴等も当然だろうという顔で行ってこいと言う。

「頼みますよゴリラ」

ケイタがスマイル満点で言った。

「いや、初対面でゴリラは酷くない!？」

「お願いしまゴリラ!」

とキリト。

「お願いしまゴリラって何! なんかつ癖みたいになってるよ!」

「頼むゴリラ」

とツラ。

「もう語尾になってんじゃん!」

ゴリラが涙目で喚き、叫ぶ。

「俺はゴリラじゃねえ! フルーツチンポ侍Gだあ!」

その瞬間、真っ赤な顔のキリトがソードスキルを発動した。

「変態!」

「ゴフォ!？」

ゴリラ、いや、フルーツチンポがキリトの剣によって巨大な影に向かって吹き飛んだ。

向こうからガンつという音が響く。

すると次の瞬間、ゴリラの悲鳴が響いた。

「ぎゃあああああああ!!!」

「ゴリ……フルチンさんになにか!?!」

ケイタ君!?! 恐らくフルーツチンポ侍を略しただけだろうけど誤解されるからね!

って言ってる場合じゃない、あれやつぱモンスターか?

「銀さん、行こう!」

キリトが件を構えケイタ達も続いて、ゴリラの方へ駆けつける。

「……うが!?!」

その時俺達は信じられないものを見た。

体長二メートルはある巨大な緑色の体、血のような赤い瞳、頭には二本の角が生え真ん中に何故かちよこんと生えてる一本の花。

この恐ろしい風貌のお方は……

「へへへへへへ屁怒紹ろろろろろろろ!!?!」

思わず俺は、いや、その場にいた全員が腰を抜かし目の前の屁怒紹を見上げる。

ゴリラも頭をうったのかそれとも屁怒紹を見て驚いたのか気絶していた。

震え上がっていると屁怒紹が口を開いた。

「よ、万事屋さんではないですか! 万事屋さんもS A Oにいたんですね!」

屁怒紹は少し涙を浮かべて言ってくるがその涙のせいで赤い瞳がよりいっそう輝き怖さが増してしまう。

「銀さん、銀さん!」

キリトが恐怖から乾いた声で俺の肩を叩き呼び掛けてきた。

「こ、この鬼みたいな人も銀さんのお友だち!?!」

「いや、友達っていうか……ご近所さんというか……」

俺がいいよどつっていると屁怒紹がその人一人驚掴みできそうな手を向けてきた。

うお!?! こ、殺される!!

「良かった〜! 私ずっと一人だと思っていたのですよ〜!」

「ぐふお!?!」

「ぐ、ぐるじ……」

屁怒紹が嬉しさのあまりか俺やキリト達を纏めて抱き締めてきた。
流石に苦しい……

いや、死ぬ！

「うわ！ す、すいません！ 大丈夫ですか、万事屋さん！」

屁怒紹が鬼の形相で言った。

「大丈夫です！」「」

下手に反論すれば殺される！ そう思った俺達は声を合わせて
言った。

つーか、この展開ってまさか……

◇

「いや、私の様な者を仲間に入れてくれるとは本当にありがたいで
すよ」

「いえ、とんでもないじゃないですかー！」

銀さんが電光石火のスピードで言った。

まあ、確かに怖いもんね……

サチなんかずつと青い顔をしているし。

フルーツゴリラさん（フルーツ○ンポとは絶対言いたくない）もケ
イタに背負われたままだし、かなり怖かったんだらうな。

屁怒紹さんを入れたことによって私達のパーティーは合計十人と
なった。

確かに見ようによつたらかなり変なメンバーだけど皆実力は確か
だし、これなら隠しボスも倒せる！

森のフィールドを歩いていると狭まっていた木々は段々と広がっ
ていく。

「そろそろ、かな……？」

そういえばこの隠しボスのクエストはケイタが提案しただけど
…… ケイタはどこでこの隠しボスの情報を知ったのだらう？ 赤

い宝石のアイテムだってケイタが持ってきた物だし。

考え事をしているうちに木々を抜け、大きな湖のほとり

に辿り着いた。

ケイタの話だとこの湖の真ん中に向かって赤い宝石を投げ込むと隠しボスが登場するらしい。

聞いた時はかなりあっさりした隠し方だとは思ったけど、まあ気にすることもないと思う。多分。

「じゃあ投げるぞー」

ケイタは軽く宣言すると赤い宝石を投げ入れる。

すると湖が淡く輝き水面に泡がたち、突如巨大な水柱がたつと共に轟音が轟いた。

『よくぞ、我を見つけた…… 我と戦い勝利すれば竜の力を与えよう……』

水柱と共に現れ透き通るような声で話すのは青い鱗に覆われた四足歩行の巨大なトカゲ、竜だった。

お、思ったよりもデカイ……!!

でも私は一人じゃない、銀さんだっている!

私は覚悟を決め剣を抜いた。

◇

デカ……!!

アルゴの野郎め、聞いてた話よりも一回りデカイじゃねーか!

本当に倒せんのか、コイツ? ゴリラはまだ気絶してっから役にたたねーし。

「よし、行くぞ皆!」

ケイタが剣を振りかざすとサチ達も呼応するかのようにな剣を構える。

『……いいー勇気ある人間達!』

竜が噛みつく気か一気に俺達も眼前にで寄る。

その瞬間だったー

「いけませえええええんんんんん!!!」

『クブエラホオ!』

屁怒紹の文字通りの必殺パンチを喰らい竜は湖へと吹きとばされ

た。

つてええええ!!

「殺生はいけない。それがいくらデータ状のモンスターとしてもその所業は許すまじ、これお仕置きです」

えー……

だからって殴るのは本末転倒だと思っただけですけど。

だってあんたのパンチ、確実に人死ぬよね？ まあ、今回はモンスターだけだ。

しかしそんなことは口がさけても言えない。

他の奴等も同じく顔を伏せている。

『さ、流石だ…… あ、いや流石でございます』

倒したと思っただけでまだ生きてるらしい。

湖の中から震えながら出てきた。

まあ、屁怒紹のレベルは知らねーがまだ第三層。いくらなんでも一撃で隠しボスを倒せはしないだろうからな。

現実だったら別だが。

このまま戦闘が続くのかと思っただけ、竜はさっきまでと違い妙にペコペコ頭を下げて屁怒紹を見ている。

『あの、もう殺生とかしかしらないんで許してください…… あ、あと隠しアイテムをあげますんで』

…… コイツ本当にデータか？ まるで本物の生き物みてーにビビってやがる。ましてやプレイヤーと戦うためにプログラムされる奴がここまで命乞いなんてするか？

つーかモンスターが喋っている時点で色々おかしいような……

俺は多くの疑問が頭の中で過ったが気にしないことにした。面倒だからだ。

「いえ、いいんですよ。わかれば」

屁怒紹はニコツと笑った。

『ヒイヒイヒイ…… 本当すんませんしたあ!!!』

竜は泣きながら湖内へと戻っていく。

やっぱなんか違和感が…… ま、いいか。

結局、隠しアイテムは当初の目的通り、キリトが貰うことになった。無事町に戻った俺達はそれぞれの居場所へと解散することになった。

月夜の黒猫団 with ツラかなりグツタリして帰っていった。ツラはしつこくUNOを誘ってきたが。

ゴリラは…… 屁怒紹が預かることとなった。つまりゴリラは生け贄となったわけだが。

にしても屁怒紹の戦闘力を考えたらこの先の攻略に役立つだろうと考えたが、屁怒紹は殺生が嫌らしく恐らく参加しないだろう。

だったらなんでSAO始めたんだと問いたいが怖いから聞くのは止めた。

残ったのは俺とキリトだが……

「ねえ、銀さん……」

キリトが少し暗い顔で俺を呼ぶ。

「なんだ？」

「いや、怖くてなにも言えなかったけど屁怒紹さんに全部待つてかれちゃったなーって……」

「あー、でもあれは仕方がないと思うよ、うん」

「……」

「……」

あれ？ なんか話が続かない。

ちよつ、気まずいんですけど？ なんて声をかければいいの？

俺が悩んでいるとキリトはいきなり走りだし、しばらく向こうに行くとピタリと止まった。

どうしたんだ？

キリトは俺の方を振り向くと、

「銀さん、また一緒にやろうね！ 今度はふ、ふた、二人で！」

それだけ言うとバツとほんのり赤い顔を背け再び走っていった。

◇

「えー、はい。まあ、実験は成功っちゃー成功でしたよ。ええ、まあ当

初の予想とは大きく離れてましたけど」

暗い夜道の中、フードに身を包み込んだ少年がこのSAOの世界にて彼だけか持つある人物に繋ぐ通話アイテムを使いとある密談をしていた。

「え？ 白夜叉ですか？ なんかそんな強そうには見えませんでしたけどね。それよりもあの天人はかなりヤバイですよ。早めにやっとなないとまずいです。第一計画は後回しの方がいいですね」

少年は通話相手話を淡々と聞き的確な返事を返す。

「あー、はい。じゃあまた指示があるまで」

通話が切れると少年はフードの装備を解除し、顔を露にした。

戻っても仲間たちに怪しまれないようにするため。

「さて、猫達の所に戻るか……」

特に特徴のない顔をした少年、月夜の黒猫団参謀ケイタは今の状況を真底楽しむように呟いた。

第8話 私が面倒見るからとか言って最終的に
母さんが面倒見ることになるんだよ！

SAOデスゲーム開始から一年三ヶ月の時が過ぎた。

現在攻略は第五十八層まで進み、周りからはもしかしたらもしかするんじゃない？　のような空気が流れ始める。

その頃になるとSAO内においてもあらゆる派閥ならぬギルドが作られた。

血盟騎士団や聖竜連合などといった大手ギルドを筆頭にSAO攻略を進めることとなった。

そんな中、銀髪の侍、坂田銀時は――

「やべーよ。ここのケーキ超うめーよ。五十層まで来てよかったぜ」

とあるレストランでケーキを食べていた。

それを見ていたキリトが心配そうな目で見る。

「ねえ、いいの銀さん？」

「あ？　なにが」

「この間アスナさんから呼び出しうけてなかった？」

「あー、別にいいだろ。どうせまた勧誘なんだからよ」

銀時は相変わらず基本ソロ、時々キリト共に攻略に挑むというスタンスでやっている。

それを気に食わないと思っているのが血盟騎士団副団長アスナ。

完全なる初心者だった彼女は信念と努力によって副団長という地位にまで登り詰めたのだ。

そんな彼女だからこそ銀時のように適当にやっているのが許せないのである。

「…… あー！　ちよつ、ちよつと銀さん！」

食事に集中し続ける銀時の肩を必要以上にキリトが叩く。

「なんだよ痛つてーな。あー！」

眉間にシワを寄せながら顔を上げた銀時の目先にはさらには眉間にシワを寄せ怒りを露にする美しき副団長アスナが立っていた。

思わず銀時は苦笑いを浮かべ、

「ど、どうも〜」

と言ったが、アスナはより一層怒りを強めてしまう。

テーブルを耳のつんぎく程の音をたて手を叩きつける。

「銀時さん！ いい加減にしてくれませんかね！」

「おいおいそんな風に怒り散らしたら血圧上がるよ。健康のアスナの呼び名が泣くぜ」

「健康じゃなくて閃光よ！ どうやったらそんな風に聞こえるのよ！

貴方、耳に地獄のイヤホンでもつけてるんじゃないの！」

アスナが剣を抜きそうになったの見たキリトが慌てて間に入る。

「あの、二人共落ち着いて！」

しかしアスナの怒りは収まらない。

このままケンカが始まる。そう思われた時だった。

「あの…… 万事屋銀さんですか！」

「「？」」

突然の声に三人が振り返る。

そこにいたのはひ弱そうな少年だった。

見ると目には少量の涙が浮かんでいる。

「リアルじゃ確かにそうだけど……」

銀時が言い終える前に少年が銀時の襟を掴み上げる。

「お願いします！ 僕の…… 僕の……！」

「ちよつ、ぐるじい……」

苦しむ銀時に構わず少年はここで話すのはまずいと言い無理矢理連れていかれてしまった。

「えー、私の話終わってないのだけれど……」

アスナが唾然としていると気を使ったのかキリトが、

「パフェ食べます？」

と食いかけを渡してきた。

「貴方も大概にしなさいよ」

◇
第三十五層、迷いの森。

今、私は男性三人、私を含めた女性二人の五人パーティーを組みとクエスト攻略に挑んでいたのですが問題が起きてしまいました。

「どうして私にはヒールクリスタルをくれないんですか!」

「なに言ってるのよ。アンタにはそのトカゲがいるんだから回復アイテムなんて必要ないじゃない」

私は赤髪の女性、ロザリアさんの自分勝手な発言に対しかなり怒っています。

なにより頭の上に可愛らしく乗っている私の大事な友達ピナをトカゲ呼ばわりすることが許せない。

「そういう貴方こそろくに前衛に出ないのにクリスタルが必要なんですか!」

「あら、お子さまシリカちゃん違って私は男達に回復してもらえないんだし、必要じゃない」

「なっ!?!」

『ギョルル!』

ロザリアさんの嫌みたっぷりの発言に流石のピナも唸る。

他の皆が止めようとすると、私はもう我慢の限界!

「わかりました! 貴女なんかとはもう組まない! 私を欲しいって言うパーティーなら他にも山程あるんですからね!」

私はそれだけ言うとその場から去っていった。

他のメンバーが止めようとすると関係ない!

あんな人とは一緒にいられない。

私はピナと共に暗闇が支配する森の中へとは歩いていった。

◇

たく…… まーた面倒な仕事ひきうけちゃった。

つーかSAOでなんで万事屋やんなきゃいけねーんだよ。

いや、それよりも重要なのは、

「ハハハハハハ」

あ、やべーよ。迷ったよこれ。

どうすんのこれ、ねえどうすんのこれ。

森をさ迷っていると向こうの方の暗がりで暴れているモンスターが見える。

あれは近藤……！

ってボケてる場合じゃねーな。ありや確かドラंकエイプだとかいう猿みてーなモンスターだが、ヤベエ、プレイヤーが襲われてやがる！

考えるよりも行動。

俺は背後から一気に一太刀加えドラंकエイプをぶったぎった。

ポリゴン状態になりドラंकエイプが消えた後には小さな嬢ちゃんが残っていた。

「大丈夫か、ん？ なんだその光？」

嬢ちゃんは何か光り輝く物を大事そうに抱えている。

だがそれもポリゴン状態になって完全に消えた。

すると嬢ちゃんがいきなり泣き出しやがった。

「ピナ……… ピナ！ どうして………」

「え？ ちよつ、な、なんで!? え、これ俺のせい？ 俺のせいなの!？」

◇

「グス……… ピナは私の……… 大切な友達なんです」

私は突然現れ助けてくれた銀時さんにこの一部始終を話していた。

ピナは私がやられそうになった所を身を呈して守ってくれた。

なのにピナは………!

「嬢ちゃん、てかシリカだったな」

「………はい」

「お前、もしピナが助かるって聞いたなら何でもする気があるか？」

「え……… なんでも………」

私は自分の胸を反射的にバツと抑えた。

「いや、違うからね！ なんでもっていつてもそういう事じゃないか

らね！ 俺そういう趣味ねーから！」

「じゃ、じゃあどういいうことなんですか。まさかピナが助かるんですか！」

思わず大きな声で言ってしまった。

でも今は気にしている余裕もない。

銀時さんは真剣な顔で言う。

「その羽、ピナの羽だろ」

「え…… はい」

私の手の中に残っている羽はピナが残したもの。

でも羽だけじゃどうしようもないんじゃないか……

「前に知り合いから聞いたことがあってよ。確かそいつは心だ」

「心？」

「ああ、アイテムレージ開きやあわかるけど、多分ピナの心つてなってるだろ」

私は震える手でアイテムレージを開く。

すると確かにピナの心と表示されていた。

「これが残ってんのなら蘇生アイテムさえ使えばピナは生き返る」

「本当ですか！ よかった…… その蘇生アイテムはどこに！」

ピナ…… 私の大切な友達を助けるためだったらなんでもする！

「えーと、確か第四十七層の思いでの丘だかにあるはずだ」

「よ、四十七層……」

今の私のレベル44。四十七層の適性レベルは47。

このSAOの世界じゃ少しの差が命取り。しかも適性レベルの10は上回らなければいけない。

「今の私では無理ですけど…… レベルさえ上げれば……！」

「あーと言いくらいなんだがよお、三日以内に蘇生しなきゃピナの心は消えちゃうんだ」

「え……」

三日以内、そんなの無理だ…… とてもじゃないけど。

さらに涙が浮かんでくる。

ピナ……

「いや、泣くなつて！ あー、わーつたよ。俺が協力してやる」

「え、で、でも」

「遠慮することあねーよ。俺は何でも屋、万事屋だからな」

「万事屋……！」

男性を苦手と思っていた私だったけど何故かこの人なら信じてもいい気になった。

この人は何処と無くあの人に…… 師匠に似ている気がしたから。

第9話 ロリコンと思われたらフェミニストとでも言っておこう

この人は似ている。

木が生い茂る暗い森の中で私は銀髪の人と向かい合っていた。

この人を見て少し不思議な感覚を私は覚えていた。

銀髪の何と云うか気だるそうな目をした男の人はどうしてが師匠に似ている気がしたから。

でもはつきり言ってみても年齢も違うんだけど…… 毛髪の数とか。

どうしてだろう？

「どうした？ ボツーとして」

「わっ！ な、なんでもありません！」

いけない、今はピナの為に出来る限りの事をしなきゃ。

銀髪の人、銀時さんはトレードウインドウを開いた。

私の目の前にも同じく半透明の画面が映る。

トレード欄に表示されるアイテムはシルバースレッドアーマーにイーボン・ダガーと私の見たこともないものばかりだ。

あの、と私が聞く前に銀時さんは軽く言ってきた。

「この装備使えば、まあ少しはレベルも底上げできんだろ。俺も一緒に行つてやつから、もう泣くんじゃーねーぞ」

どうして……

どうしてここまでこの人はしてくれるのだろうか？

この世界に閉じ込められてから私はいろんな男の人に助けられてきた。

でもそれには、いつも必ず裏があつて年上の人から言い寄られたり下心からの行動だった。

でも何故かこの人からはそういういった下心が感じられない。

だから私は素直に聞いてみることにした。

「あの…… なんでそこまでしてくるんですか？ 会ったばかりで

「……こんな」

「そりゃあ泣いてる女放つとける程、俺も酷くはねーよ。それになんか似てんだよなー、俺の知り合いによ。性格は全然違うのに」

「え……」

今の言葉……

前にも一度言われたことがあった。

やましい気持ちも偽りの気持ちも一切ない。

どこか悲しそうな反面嬉しそうなその瞳の奥にある真っ直ぐな思いで。

「信じます……」

「え？ あ、ああ。じゃあ行こうぜ」

「はいー」

私はこの人と一緒にピナを必ず助ける！

だから待ってて…… ピナ。

◇

無事、森を抜けた銀時とシリカは三十五層主街区へと来ていた。

白壁に赤い屋根の建物が並ぶ牧歌的な街はさほど大きくはないが中層プレイヤーの主戦区となり、かなりの人数が特にSAOに存在する天人プレイヤーが多く行き交っている。

天人の多くは地球人とは違いあまり攻略には参加していない。

そのせいかほとんどの天人は中小レベルの強さしかなく、この三十五層に留まっているのだ。

原作ネタ的な意味でも久しぶりに多くの天人を一気に目にした銀時は物珍しそうに周囲を見渡す。

そんな銀時を連れシリカは大胆にも手をとって歩いていたがシリカ自身無意識にやっているせいが恥ずかしさを感じなかった。

普通ならばカップルか何かと勘違いされ話しかけづらだろう。だがお構いなしに近ぐ輩はいる。

これもシリカの人気からなるものだろう。

他のそれも銀時のような一見胡散臭い男に先を越されまいと動く

のも無理はない。

「シリカちゃんじゃくん。この間のパーティーメンバーはどうしたのう？」

顔見知りらしい語尾にうつつける男にシリカは戸惑う。

「え、いやその……」

「もしかして解消した？ だったら俺と組もうよう〜」

「すいません…… お話はありがたいんですけど……」

シリカは相手を最低限傷つけまいと嫌味臭くなく丁寧に断り、視線を傍らに立つ銀時へと向ける。

「……しばらくこの人とパーティーを組むこととなったので」

「ええー、この男とう…… 何でよりもよつとこんな天然パーマとう？」

男は銀時を訝しげに睨みつける。

するとコンプレックスを言われた銀時は案の定悪口と言う名の武器で反論しだす。

「ああ！ なんだいきなり失礼な事、言い放ちやがって！ テメエこそ一度しか登場しないモブキャラの癖になに無駄にキャラたつた喋り方してんだ、こらー！」

「なんだとう！ モブキャラだからこそキャラ立ちしたいんだよ！ モブキャラだから必死なんだよ！」

「お前、途中から語尾にうつつけるの忘れてんだろーが！ キャラ作ってんじやねーか！」

その後、泣きそうになったシリカに男も銀時も慌てて宥めケンカを止めたのは、また別の話。

◇

「あんの、銀髪天然パーマあ……！ 気になって来てみれば女の子とイチャイチャなにしてんのよー！」

行き交うプレイヤー達の中に憤怒の思いで銀時を、睨みつけるフードの女、アスナがいた。

普段はお目付け役として血盟騎士団の幹部がつくのだが隙を見て逃げ出したのである。

何時ものように説教を垂れるため銀時の所に言ったものいきなり現れた少年に連れていかれた銀時が気になったアスナは三十五層まで来ていた。

のだが銀時は運が悪いことにシリカと手を繋いでいる瞬間を見られていた。

ちなみにアスナ自身、別に恋心を抱いているというわけではない。自分は攻略に参加もせず女とイチャイチャしているのが許せない。と心に言い聞かせている。

S A Oに怒りを表現するオーラがある訳ではないがその怒気に周りのプレイヤーが次々に離れていく

「絶対に許さないわよ……！ 銀時さん」

アスナは静かにそう呟いた時だった。

肩をポンつと叩かれ振り返ると、そこにはアインクラッド解放軍。元々は攻略組のギルドだが、とある事情から今では違反を起こすプレイヤーを捕縛する警察のような役割をしている。

その警察の役割を持つ厳つい男は、

「君…… その剣で何するき？」

「え、あいやその……」

アスナは怒りのあまり無意識の内に剣を抜いていたのだ。

勿論圏内で剣を抜きプレイヤーを刺そうが死にはしないがそれでも怪しげな雰囲気を漂わしていたアスナを見逃すはずもなく厳つい男は職務質問を続ける。

「だから私は血盟騎士団のアスナよ！ ほら、知ってるでしょ！」

「なんであの閃光がこんなところにいる？ 最近天人ばかりを狙った悪質なプレイヤーキルが流行ってるんでね。ちよつと来てくれるかな？」

「え、いやちよつと待って！ あ、わかったフード脱ぐから！ そしたらわかるからー」

「はいはい、詳しい話はギルドでね」

「だからアスナだつてばああ!!」

アスナの悲痛の叫びが闇夜に響いた。

◇ 私と銀時さんは食事をし、その後風見鶏亭というNPCの店の二階に上がった。

広い廊下の両脇に、客室のドアが並んでいる。

流石に部屋は別だけですがすぐ隣だなんて…… ちょっと驚いた。

だけど銀時さんは全く気にした様子もなく、

「あー、疲れた。寝よ寝よ」

と欠伸をしながら部屋に入っていく。

少しは思うところのないのかな…… と何故か不満気に思ってしまった。

私も部屋に入り武装解除すると下着姿でフカフカのベッドに飛び乗った。

このまま明日に向けて体力を温存ー

「と思っただけど…… 眠れないな」

いつもピナのふわふわの体を抱きながら寝ていたせいかわベットがとても広く思えた。

それにしても現実じゃとてもじゃないけどあり得ないよね。

私が自分よりも小さな存在を、生きた生命を抱き締めて寝るなんて。

五歳の頃に可愛い猫ちゃんを飼っていた時、嬉しくて抱いて寝た時はあっただけど……

「朝起きたら冷たくなっていたんだよね……」

それ以来動物を飼うのが怖くて…… いや殺すのが怖くて近づくことすらできなかつただけどSAOの世界に来て始めてたくさん触れ合うことができた。

ピナと出会って友達になって今まで感じられなかった経験を味わえた点においてはSAOに感謝…… してもいいのかな？

いや、いいわけないか…… 師匠だって心配してるだろうし。
「……」

なんだろう。

悲壮感に浸っていたら急に銀時さんと話をしたくなった。

どうしよう。いくらなんでも非常識かな……

でも会いたい……

脳内で悩みながらも体は勝手に動き一番お気に入りのチュニツクを身にまとうと銀時さんの部屋の前まで足を運んでいた。

どうしよう。来たのはいいけど扉を叩く勇気が……

あ、そういえば師匠がこういう時は……

ーいいか珪子？ 迷った時は本心に従って進め。でないと後悔するぞ。いや、俺は別に頭の事は言っていないからな！ 別にあの時増毛スプレー買いにいかなくなったことを言っているんじゃないからな！
「誰も聞いてませんし、自分で恥ずかしい話暴露してるじゃないですか！」

…… としまった。つつい師匠の教えを思い出してツツコンでしまった……

いきなり一人でツツコミを入れて恥ずかしかったけど幸い周りに人はいないし部屋にいる人には音声遮蔽圏で聞こえてはいないはず。

私は師匠の教え通り本心に従うことにし、ドアを叩き銀時さんを呼ぶ。

すると中からお尻をかきながら銀時さんが出てきた。

す、少しは女性の前だということを気にしてほしいな。

「ふぁー、どうしたんだよ」

「あ、あの、えと……」

しまった理由を考えていなかった！

どうしよう。

「もしかして四十七層のことでも聞きてーのか？」

「え？ あ、はい！ 是非とも聞かせてください！ せつかくなので部屋の中で！」

私は大胆にも部屋に入る宣言をしてしまう。

いきなりこんな事言っただけに思われちゃう？ と少し焦ったけれど銀時さんは鼻をほじりながら、いいぞーと言ってドアを大きく開け

た。

…… なんだろう。負けた気分……

私は納得がいかないまま部屋に入った。

椅子に座り、銀時さんはベットのの上に座ると小さな小箱を実体化させた。

箱を開けると中から小さな水晶球が出てきた。

「綺麗……。それはなんですか？」

「ミラージュ……。なんたらだ」

「名前忘れたんですね。まあいいです」

銀時さんは少し恥ずかしそうにしながらも器用に手早く操作する。すると球体が青く発光し、その上に大きなホログラフィックが出現した。

凄い……！

アインクラッドの恐らく四十七層のマップが丸ごとそれも街や森、木の一本に至るまで微細に表示されている。

システムメニューから表示できる簡素なマップとは偉い違いだ。

「ここが主街区で、こっちが思いでの丘だ。んでこの道を通ると……」

銀時さんは説明しながら動かしていた指を止めた。

すると気だるそうな目から真剣な目にかわりドアを睨みつける。

「ど、どうしたんですか？」

「誰かいるな……」

銀時さんは呟くと凄いスピードで一気にドアの前まで行き引き開けた。

するとドタドタと駆けさる足音が聞こえた。

「今のなんですか!？」

「ちっ、誰だか知らねーが話を聞かれてたらしい」

「え？ でもドア越しじゃ声は聞こえないはず……」

「聞き耳スキル高めりゃ聞こえるんだとよ。アルゴが自慢気に話してた」

アルゴってあの鼠のアルゴ？ 銀時さん知り合いだったのか……

いや、それよりもどうして立ち聞きなんか。

「まあ、逃げられたんじゃ、しょうがねえ」

銀時さんはそう言うのとドアを閉めてしまった。

「ええ!? いいんですか?」

「いいんだよ。たいして聞かれてまずい話はしてねーだろ。それになんかあっても大抵は大丈夫だ」

そんな適当でいいのかな?

少し心配だったけど銀時さんは強いし、大丈夫……かも?

「あー眠、けどやつとかなきやダメか…… あーと今からメツセージ打つからよ、待っててくれや」

銀時さんは水晶地図を片付けウインドウを開いた。

ホロキボードを表示させ微妙に慣れない手つきで指を走らせる。

私はその背後でベットに丸くなり銀時さんの背中を見つめる。

大きいな……

私みたいに小さくない大きな背中。

この背中を見て銀時さんが色んな物を背負って生きていると私は思った。

あー、そうか。

だから似てるんだあの人と……

普段はだらしなくて、でも芯の通った真っ直ぐな心の持ち主……

私は久しく忘れていた温もりを思い出し自然と目をゆっくりと閉じた。

第10話 人間知られたくない事くらい一つや二つはあるもんだ

大量の湿り気を肌で感じながら私はザアザアと降り続ける雨にうたれていた。

冷たくて寒い…… これじゃあ明日は風邪引いちゃうな。

ま、いいか…… どうせ心配するような人もいないし……

私はねだるように求めるように天を仰ぎ見る。

当然顔上には雨粒しか乗らない。

暖かい日差しなんて物は夢のまた夢。

このままあの遥か高いお天道様でも見ながら静かに眠ろうかな……

「おじよーさん、どうしたんだいこんな所で。こんな日に傘もさささないで」

突然背後から男性の声がかかった。

どうせあてのない子供を狙った人身売買の違法の連中だろう。

私は恐怖することもなく何となく淡々と質問に答える。

「今日は…… 雨だから……」

「そりやおかしい。傘とは本来雨をしのぐためにさすもんだ」

「これでいいんです。雨の日まで傘をさしていたらいつまでたってもこの空を眺めることができません。雨空でもいい…… 私はこの空を拝みたいんです」

背後から徐々に近づいてくるのがわかる。

このまま私は生きた兵器として売られるのだろう。

そう思った瞬間だった。

私の頭部の冷たさと雨粒の感覚が消えてしまった。

顔を上げるとそこには傷だらけの古そうな傘をさすハゲ頭のおじさんが。

「久しぶりに帰って来てみるもんだ。娘と同じ事を言う奴と出会えるとはな」

「え……」

この人の目を見てわかった。

悪い人じゃないんだ……

なんの根拠もないけど…… 今まで見てきた人とは違う。

真っ直ぐで暖かい目。

「だがなあこのままじゃ風邪を引いちゃう。俺と一緒に来い。どうせ行くあてもないんだろ？」

「……！ はい」

その日からその人は私の師匠であり…… お父さんとなった。

◇

「ん…… 朝？」

目を覚ますといつの間にか朝になっていた。

夢の中で昔の事を思い出していた私は自然と目に少量の涙が浮かんでいた。

涙を拭き取りながら私は気づいた。

あれ？ ここって……！

見るとベットの所で床に大口を開けて眠りこける銀時さんがいた。

嘘……！ 私、銀時さんの部屋で寝ちやたんだ！ いやそれよりも銀時さんのベット取っちゃった。

申し訳なさと恥ずかしさの感情が胸の中で渦巻いていると銀時さんが目を覚ました。

「フアー、よく寝たぜー。お、シリカも起きたか」

「お、おはようございます。その…… すいません、ベット……」

「あー、別にいいよ。そんならい。それよりも大丈夫か？」

「え？ あー！」

しまった。私の目は恐らく赤くなっていると思う。

まだ流れていた涙が残っているからだ。

でも銀時さんはその涙がピナに關係しているのかと思ったのか、

「安心しろ、お前の友達はず助けちゃっからよ」

そう宣言する銀時さんの瞳は何時もの気だるそうな目付きから変

わっていた。

絶対に約束を守るという信念が込められている瞳に。

「……はいー!」

そうだ。昔の事を思いだしている時でも泣いている時でもない。

今はピナの為に全力をつくさなきゃ!

私は希望を胸に新たに決心をした。

◇

ポーシヨン類の補充を済ませ、すっかり準備万端になった私達はゲート広場にいた。

「んじや行くか。転移フローレン!」

シーン

銀時さんは自信満々に言ったけど何故か何も起きなかった。

これって……

「あの、銀時さん。もしかして間違えました?」

「いや、おかしいな…… 転移フロードム!」

シーン

「あ、あの……」

「転移フロリレン!」

「いや、ちよつと……」

「転移フリーダム!」

「あの……」

「開けゴマ!」

「いや、もう違う合言葉じゃないですか!」

その後、結局名前を思い出せなかった銀時さんは恥ずかしそうに頭をポリポリとかきながらその辺にいたプレイヤーさんに名前を聞いていた。

この人もあの人と同じで今一決まらない人だな……

「あー、わりいわりい。転移フローリア!」

今度こそ名前を言えた事によって私達二人を眩い光が覆い込み、エフェクト光が薄れた途端に、視界に様々な色彩の乱舞が飛び込んでき

た。

「うわあ……！」

無数の花々で溢れかえった四十七層を視て私は新鮮味と驚きの声を上げた。

円形の広場を細い通路が十字に貫いて、それ以外の場所には煉瓦で囲まれた花壇となっていた。

仮装世界なんだから当たり前だろうけど見たこともない草花が咲き誇っている。

「凄いですね！」

「まあ、確かにとても作り物とは思えねーよな」

ここはフラワーガーデンと言うらしい。

街だけじゃなくフロア全体が花が咲き誇っているだなんて少し素敵かもしれない。

それに……

「お天道様がよく見えます……」

「お天道様？」

「あ！ な、なんでもありません！」

銀時さんは不思議そうに目をぱちくりとさせたけど直ぐに興味をなくしたのか鼻をほじくり、

「まあーいいか。さっさと行こうぜ」

「は、はい」

銀時さんと一緒に思い出の丘に向かう間に気づいた事があった。

周囲を見回す限り歩いているのはほとんどが男女の二人連れだった。

手を繋いだり…… う、腕を組んだり…… もしかしてここって

……！

そ、そういう場所なんですか？ と銀時さんに聞く勇氣なんて出るはずもなく、ただ顔が赤くなっちゃう……

火照った顔を誤魔化すように私は慌てて銀時さんにふと思った事を聞いた。

「そ、そういえば銀時さん、前に私に似てる人がいるって言っていました

けど、どんな人なんですか？」

本当はこのアイコンクラッドで現実世界の話を持ち出すのはタブーなのだけれど、私の似てるという人がとても気になった。

前にも娘に似てるって言われたし。

「ん？ あーその話か。なんつーか実際は……」

銀時さんは困ったような顔になり一度私を見つめ、

「そんな似てない……かもな……」

「え？ そうなんですか？」

「ああ。最初お前を見たときは何故だがアイツと似てる気がしてよー。あ、アイツってのはちよつとした理由で預かってる娘がいてな。これがかなりの大飯食らいでしかもゲロは吐くし毎日アルアルうるせーし……」

聞く限り確かに私とは似てないかもしれない。

銀時さんの口から出るのは声優さんの無駄使いゲロインだとか、かなり酷いな……

でも銀時さんは何処か楽しそうに話していた。

こんな事言ってるけど本当はその人の事を大事に思っているんだ。まあ、多分だけ。

「とにかくはつきり言ってシリカ、お前の方が女らしくてキレーだし声優さん使いこなしてる感バリバリだ。だからあんま似てねー」

「き、綺麗って……」

今さらりとんでもない事言われた……

なのに銀時さんは構わず鼻をほじくりながら話を続ける。

「だけど、本当なんでだろうな…… お前の目を見た時にそう思っちゃまったんだ」

「目を……」

人の目は正直だ。

師匠に出会うまで一人で生きてきた私はいろんな人達の目を見てきたからわかる。

その人がどんな人なのか。

だから銀時さんも同じなんだ。

私が師匠と似てると思ったように銀時さんも私の目を見てその人の面影を感じたのだろうか。

「……！」

突然銀時さんが足を止めた。

どうしたのだろうかとうと前を見るとそこには巨大な歩く花のモンスターがエンカウントしていた。

「うわ……！」

歩く花はなんと言うか気持ち悪かった……

ヒマワリに似た黄色い巨大花が牙を生やした口をぱっくりの開いて毒々しい赤をさらけ出してくる。

あまりの気持ち悪さに私は嫌悪感を覚え体が強張ってしまう。

「いやあああ!!！」

歩く花は突然私に飛びかかってきた。

思わず叫び声を上げ意味もなく短剣を振り回しながら逃げているとニユルニユルと動く触手に足を絡められてしまった。

うぐ、気持ち悪い！ いや、そんなことよりも！

「す、スカートが！」

私の体をモンスターは軽く持ち上げ頭を下にされ完全に宙吊り状態にされてしまった。

現実世界だったらこの位は対処できるのに……

「銀時さん！ パンツ見ないで助けてください！」

「無茶言うな！ 高倉健並みに器用じゃねーんだよ！」

こんな事ならならゴツイ装備にでもしておくべきだった！

私に無茶を言われ戸惑いながらも銀時さんが銀色に光る剣で歩く花を斬り裂いた。

歩く花は一瞬でポリゴン状態になり、その欠片を浴びながら私は着地した。

「あの…… 銀時さん……！」

「なんだ……！」

「見ました……！」

実を言うと着地しするとき私はスカートを押さえる暇などなく全

開状態でパンツを披露してしまった。

顔を赤らめながら見ると銀時さんは口笛を吹きながら、

「いや〜、み、見てないな〜、俺は。うん。」

完全に上擦った声で言った。

「絶対嘘ですな〜！」

◇

少々気まずい感じはあったが二人はエンカウントするモンスターを順調に倒し順調に進んでいた。

最初は現れるモンスター、それも触手を操るという生理的に受け付けない女の子の嫌いなモンスターナンバーワンモンスターにシリカは手こずったが銀時のサポートにより戦闘にも慣れていった。

おかげで思ったよりも早く二人は思い出の丘へと辿り着いた。

「うわあ……」

思わず今日二回目の歓声を上げシリカは数歩駆け寄った。

丘の頂上には周囲を木立に取り囲まれ、ぽつかりと開けた空間一面に美しい花々が咲き誇っている。

「やっとな着いたか。たく、無駄に長かったな」

銀時が剣をが腰の鞘に納めながら言った。

「銀時さん、ここに花が？」

「ああ。真ん中あたりに岩があんだろ。そのてっぺんに……」

銀時の言葉が終わらない内にシリカは走り出していた。

当然と言えば当然だろう。

大切な友達であるピナを一刻も早く生き返らせたいたのだ。

シリカは息を切らせながらも胸ほどまでもある岩に駆け寄りおそるおそるその上を除き込む。

「え……… ない………！」

しかし、そこには何もなかった。

雑草が生え揃っているだけで花らしきものは一切なかった。

「そんなはずはねえ……… よく見てみる」

「あ………」

銀時に視線を促され見てみると草の間に、一本の芽が伸びようとしていた。

芽はたちまち高く成長し先端に大きなつぼみを結んだ。

そのつぼみは鈴の音を鳴らし開いた。光の粒が宙を舞っていく。神秘的な光景にシリカは少しうっとりとするがピナの事を思いだし少々焦りぎみになりながらも花に手を触れる。

するとネームウインドウが開き、《プネウマの花》と表記された。

「これでピナは生き返るんですね……」

「ああ、だがここじゃ危ねーし、取りあえず帰るか」

「はいー」

少しでも早くと駆け降りるように進み麓に到達した。

そして歩いていき小川にかかる橋を渡ろうとしたときだった。

銀時は突然真剣な顔にかわり一際低く張った声が発せられた。

「おい、何時まで下手な尾行してるつもりだ。こら」

シリカが、なんだと思いきや銀時の視線の方を見ると橋の向こうに人が現れた。

その人物は驚いたことにシリカの知っている女。

真っ赤な髪と唇をし、エナメル状に輝くレーザーアーマーを装備したロザリアだった。

「ロザリアさん……?!? なんでこんなところに!」

シリカが驚いていると銀時が前に出、ロザリオを睨み付ける。

「ようやく尻尾つかんだぞ、コノヤロー。お前のせいで俺のパフェ台無しになったんだならな」

何を言っているのかシリカにもロザリオにもわからないがロザリアはフンと鼻で笑い、

「もしかしてあんたが最近うちの周りをこそこそと動きまわってるプレイヤー?」

「ああ。お前、つーかお前らに用があつてな。この殺人集団がよお」
殺人集団。

その言葉にシリカは驚愕する。

しかしシリカの眼前に浮かぶロザリアの頭上に浮かぶカーソルは

緑色だ。

本来人を殺すとなれば、このアインクラッドの世界ではそれを晒すためオレンジに変換させられるばすだ。

シリカが呆然となりながら銀時に問い質した。

「あの…… 銀時さん。ロザリアさんは、グリーンじゃ……」

「別に殺人集団だからって全員が全員、人を殺してるわけじゃねーよ。グリーンは奴がこそこそ獲物を見繕ってオレンジの奴に殺させんだよ。ま、つまりは臆病者だな」

「臆病者とは言ってくれるはね。私達はただ制裁を加えてるだけよ」

「制裁……？ 制裁ってどういうことですか！」

理由はわからないがロザリアが殺人者の仲間であることが発覚したシリカは声を興奮気味に叫ぶ。

するとロザリアの代わりに銀時が口を開いた。

「天人狩り…… 知ってるか？」

「え……！」

天人。その言葉に個人的な理由からも胸をドキッとさせたシリカは天人狩りについて思い出す。

ここ最近天人ばかりを狙ったプレイヤーキルが問題となっていたのだ。

「天人ばかりを狙った攘夷的な行動。これはコイツの仕業だ」

「人間をこけにしか思ってない天人どもを殺して何が悪いわけ？ 私は間違ったことなんてしてないわよ」

ロザリアの開き直った台詞に眼帯の男、高杉を思いだした。

純粹に天人を憎み、殺意へと破壊へと代わる。ロザリアはかつての仲間と同じなのだ。

「けっ、お前みたいなのが何でこのSAOにいんのかわかんねーぜ。いや、それともこの世界に来て今までの不満が爆発したか？」

「…… ええ。あんたの言う通りね。このアインクラッドでデスゲームが開始された直後、他のプレイヤーが泣いているなかで私はチャンネルを掴んだと思ったわよ。制裁のね」

シリカは足を震わせていた。

ロザリアの冷徹な声、そして自身の正体がばれているかもしれないという恐怖に。

「それであるギルドも襲ったのか。珍しく天人と地球人が仲良くしてた四、五人のギルドから天人だけを殺したのか」

「ああ、あの天人なんかと仲良くする胸糞の悪いギルドの事ね」

眉一筋も動かすこともなくロザリアが頷いた。

「リーダーの男は泣きながら仇討ちしてくれる奴を探してたんだよ。おかげで現実世界で万事屋やってた俺に依頼がきてな。お前を取っ捕まえて牢獄にぶちこんでほしいんだとよ」

銀時は冷静ながらも冷たく鋭い声で言った。

だがロザリアはそれがどうしたと答える。

「ふん、天人なんかと仲良くするあいづらがバカなのよ。同じ地球人だけ殺さなかっただけでもありがたいと思っただけでほしいわ」

ロザリアの目に凶暴そうな光が帯びた。

その事にシリカは気づき短剣に手を伸ばす。

銀時は相変わらず剣を鞘に納めたままだ。

「いつとくけど私は一人じゃないわよ。他にも仲間はあるんだから」

ロザリアが合図をだすと次々と隠れていたプレイヤー達が現れる。

十人ほどの数にシリカは思わず圧倒されているとロザリ

アは余裕綽々に言った。

「でも、あんたさあ、どうしてあたしがその天人狩りの仲間だと思っただけ?」

「こつちには悪趣味な情報屋が知り合いにいるんでね。アインクラツド内の事ならなんでも知ってるネズミがな」

ネズミとはアルゴのことだろう。

しかしロザリアはそんな事わからず眉を寄せ、苛立のちの様子を見せる。

「ふん、まあ別にいいわよ。でもあんたさあどうして私がお子狙ったのか……理由はわかる?」

「……!」

シリカは思わず肩をビクツと震わせた。

おそろくいや、確実に知られたい現実をよりにもよって少なからず好意を抱き始めた銀時に告発されることにシリカは絶望を覚えた。だがこの手勢にどうすることもできずただ呆然と事の成り行きを見つめるしかない。

「知らねーな。殺人野郎の気持ちなんてわかるわけねーだろ」

「じゃあ教えてあげる。そいつは天人……それも宇宙最強の戦闘民族、夜兔よ！」

ロザリアによって語られた真実にシリカは絶望し、そして銀時は――

第1話 銀のニート侍 って誰かだ!

ロザリアの口から語られた真実、シリカは夜兔族と聞かされ銀時は――

「はーん」

と言いながら、ふてぶてしく鼻をほじくっていた。

「「「ええ!?!」」」

銀時のあまりにも意外すぎる反応にロザリアを始めその場にいたプレイヤー全員が驚きの声を上げた。

当然だろう。

夜兔族といえど見た目は地球人と大差ないが秘めている力は何でもなく恐ろしく強く宇宙でも最強と言われている。

それがあのシリカが夜兔だったと聞かされれば、まさしく驚天動地誰もが驚愕し騒ぎ立てるはずだろう。

だが目の前にいる銀髪天然パーマの男は臆することも驚くこともなくただ鼻をほじっているのだ。

「あ、あんたよくもまあ、鼻ほじってそんな風にしてられるわね。ど、どういう神経してんのよ」

逆に驚きロザリアは目を丸くしている。

銀時は相変わらず表情を変えずに、

「別にコイツが夜兔だからなんだっつーんだよ。言っとくけど俺んところには声優さんの無駄使いゲロイン夜兔娘がいんだぞ、こら」

銀時の言う無駄使いゲロインが誰なのかロザリアには知るよしもなく、ただただ困惑してしまう。

そんなロザリアに銀時は続けて、

「それに、お前夜兔かああああ!? とかいうネタは原作でもうやってんだよ。今更同じネタ使われても面白くねーだろうが」

「意味がわからないわ……」

ロザリアは信じられないとこめかみを抑えながら呟いた。

「意味がわかんねーか? じゃあ教えてやるよ。俺はコイツが人間だ

とか天人だとかましてや夜兎だとかゴキブリだとかそんなのはどうでもいい」

「最後のゴキブリはいりませんよね!」

シリカは思わずツツコムが反面驚いていた。

今までこのSAO、アインクラッド内で拒絶を受けるのを恐れ生い立ちを隠していたシリカにとって銀時の言葉は一つ一つが信じられないものだったからだ。

ロザリアはそんな銀時に刃を駆り立てるような鋭い目で睨み付ける。

「ふざけないで! そいつら天人がどれだけ私達を苦しめたと思ってるのよ!」

「俺達を苦しめた…… ねえ。確かにそういうこともあるかもしれないか。けどよお少なくとも俺はコイツに…… シリカに苦しめられた覚えはねえよ!」

先程までの適当な様子から一風かわり少々の怒りが込められた真剣な表情の銀時にロザリアは一瞬怯んだ。

だがやはり数で勝っているからか余裕の表情に戻り銀時へと槍を突きつける。

「あんたの価値観なんてこの際どうでもいいわよ。さっさとそいつを私に引き渡しなさい。そうしたらあんたは見逃してあげる。元々あんたがそいつから離れた所を狙ってたわけだし」

その言葉の通りロザリアは前夜、銀時とシリカをずっとつけていたのだ。

シリカは人気あまりにあり一人になる様子が中々見受けられない為である。

銀時はロザリアの言う最後のチャンスに、

「ふざけんな。お前なんかに渡すぐらいだったら、ひろみちお兄さんに渡すわ」

「銀時さん! 私はそんなに年齢低くありません! ていうかそのネタはわかりづらいです!」

「あんた達一応今シリアスシーンなんだなら一々ボケとツツコミを入

れないでくれない！」

流石に苛立ちを感じたロザリアは声を荒げる。

「うるせーな。いつとくが何度言われようとも答えは変わらねーよ」

「あ、そう、それは残念ね。天人に味方するような奴もまた罪人よ。ここで処刑してあげる」

ロザリアの言葉を合図に周りの男達が武器を構える。

シリカは不安そうに小声で銀時に囁きかける。

「銀時さん、いくらなんでも数が多すぎます、ここは転移結晶で脱出を……」

「何言ってるんだ、ここで逃げてもいつかはこのバカ共につかまんだろーが。ここは俺に任せとけよ」

「でも……」

シリカはやっぱ駄目ですと言いかけると銀時は優しくポンツと頭に手を置き、

「大丈夫だ、心配すんな」

と言い静かにロザリアへと歩み寄っていく。

「……ん？ こいつ……まさか……」

ロザリアの仲間の一人が気づく。

銀時が何者なのか。

すると男の顔は一気に蒼白へと変わっていく。

「ちよっ、ロザリアさん！ こいつのこの格好…… 銀時だ！ 攻略

組の銀色の侍、白夜叉の銀時！」

「はあ？ ……あー！」

ロザリアもその場にいる仲間達も全員が顔を強張らせる。

白夜叉の銀時。

いつからかいつの間にか流れていた銀時の二つ名。

何故か攘夷戦争時代と丸々同じ二つ名をつけられた銀時は少々の不服を感じてはいる。

実際今も眉をひそめ面倒臭そうに頭をポリポリとかいている。

「銀時さん…… 攻略組のメンバーだったんですか!？」

シリカも驚きの声を上げる。

強いというのは理解してはいたがまさか目の前にいる銀時があの攻略組の一員とは夢にも思っていなかったからだ。

「んな、大層なもんじゃねーって。ただの暇潰しでやってまーす」

銀時はかなりふざけた言い方をしているが、ロザリア達はツツコム気にもなれない。

自分達が勝てるはずない者が今、目の前にいる。それだけで足の震えは止まらない。

「な、なに怖気ついてだい！ 数では圧倒してんだならさっさと殺つてきな！」

とロザリアは木の影に隠れながら言った。

「だったらロザリアさんも戦ってくださいよ！ 何一人だけナチュラルに逃げる準備してんすか！」

「違うわよ！ これは高等戦術よ！ いわゆるキューティーエスケープ」

「つまり逃げるじゃないすか！」

ギャーギャー騒ぎだしシリアスはどうしたい、と言いたくなるような光景にシリカは目を丸くする。

これも銀時からおりなす不思議なオーラのせいなのか…… とシリカは一瞬思うが直ぐにそれはないと首をふった。

「おい、お前ら。俺は殺し屋じゃねーんだ。だから殺すつもりはねえ。依頼人からも牢獄にぶちこむよう言われってからな。だからこの転移なんちゃらで大人しく牢屋にいきな」

銀時の取りだした転移結晶を見るとロザリアは深くため息をつき、「わかったわ…… あんたの言う通りにする」

ロザリアは大人しく武器をしまい他の男達も渋々文句を言いながら転移していく。

最後に残ったロザリアはいったん足を止め、

「…… 全員行ってしまったらか言うけど…… 実の所、感謝はしてるわよ。あんたにね」

「あ？」

たった今ロザリアの邪魔をしたはずの銀時に礼を言った事にシリカも共に驚く。

ロザリアは何処か悲しそうに空を見つめて言った。

「私は現実世界じゃただの一般人だ。別に攘夷浪士でも何でもない。でも戦争に参加していた私の父は天人共に殺された。だからこの世界に閉じ込められた時、天人共に復讐するチャンスだと思ったよ」

ロザリアの言葉にシリカは顔を俯せる。

銀時は黙って聞き続けるままだ。

「でもいざ天人を…… シリカ、あんたを殺そうとした時は手が震えていたよ。殺人ギルドって言っても私自身人を殺した経験はないし、結局銀髪のアんたの言う通り私はただの臆病者さ。まあおかげで手を汚さずにすんだけどね」

ロザリアは実際は今までシリカを殺すチャンスはあった。

だが勇気が出ず、結局迷いの森でシリカを孤立させるのを作戦を選びわざと嫌みをぶつけていたのだ。

銀時によって阻止されたが。

ロザリアの悲しそうな言葉を聞いた銀時は、

「…… 別にいいんじゃないの、臆病者で」

「なに？」

「人を殺しちゃうよりは臆病者でいた方がましだろうが。俺みたいな奴よりはよっぽどな」

ロザリアはしばらくポカンとし黙っていたが、ハッと笑い、

「訳の解らないやつだねあんた。でも…… 少しは救われた感じはするよ」

ロザリアはそう言うのと転移し、その場から消えた。

目的を果たした銀時は嬉しいと感じる訳でもなくただ悲しそうな顔を一瞬ではあるが見せた。

シリカはその事に気づいていた。



「大元のリーダーから連絡があったよ。ロザリアの奴、失敗したみたいだね。ハッサー」

「え!? あ、うん」

フードに身を包み込んだ二人の男は暗い洞窟の中で疲れた体を癒すように座り込んでいた。

「まあ、元々あいつは攘夷浪士じゃないし。仲間を誘うこと自体間違っていたんだよ。わざわざプレイヤーの個人情報まで教えてやったのに」

「いや……俺も違うんすけど……」

ハッサーと呼ばれた男は小声で呟くがもう一人の軽い感じの話し方をする男は聞こえたらしく、

「え? なに?」

と聞き返してくる。

するとハッサーは慌てて手をふり、

「いや、何でもないっすよ!」

上擦った声でいかにも怪しい感じで返すが、対して興味がないのか、ふーんと言いい仰向けに寝そべった。

「はあ……職探してただけなのに……何でこんなことに……」

ハッサーは自身の手の甲に刻まれた奇妙に笑う棺桶を見つめ深く深くため息をついた。

◇

私と銀時さんは三十五層の風見鶏定に無事帰っていた。

ロザリアさんの話を聞いた途端、自然と口が閉じてしまつて私は銀時さんと会話をする気になれくつなっていた。

まるで喉に小石でも詰まったのかのように言葉が出てこない。

私が黙っていると銀時さんは不意に口を開いた。

「んじゃここでお別れだな。ピナのこと大事にしてやれよ」

そのまま離れようとする銀時さんに私は思わず声を高くし、

「待ってください!」

と言ってしまう。

銀時さんは足を止めた。

言わないと…… ちゃんと……

「あの…… その……ごめんなさい！ 黙ってて！ 本当は天人なのに……」

私の為にピナの為に依頼の途中なのに…… 私を助けてくれた銀時さんに本当の事を言えなかった。

だから謝るのは当然だ。

「別にどうでもいいって。つーかそれはもう冒頭で言っただろ」

「でも…… でも！」

「…… はあー。あのなあ、お前が天人だからなんだっつーんだ。お前は…… お前だろう、ただの可愛い普通の女だよ」

「……！」

私は思わず口をつぐんだ。

よりもよって夜兎という恐れられる存在を知った上で言ってくれたその言葉が私の心に深く染み込んでくる。

「じゃあな、まあなんかあったら連絡くれや。俺は直ぐに飛んでくるからよ」

私は今度こそ銀時さんの大きな背中を静かに見送った。

◇

一人部屋に残った私はピナの心を実体化させる。

ウィンドウ表面に浮かび上がった水色の羽をテーブルに優しく置いた。

「待っててピナ……」

プネウマの花を呼び出し溜まっている雫を羽に振りかけた。

ピナ…… いっぱいお話ししよう。

私を…… ピナを助けてくれた…… 私が師匠以外で初めて心を許した人の話を……

私の憧れの人の話を…… ピナ。

Episode of Argo
Section 1 常闇に出会いし鼠と銀色の侍

いつからだっただろう、変わってしまったのは。

いつからだっただろう、私がオイラになったのは。

いつからだっただろう、何もかも全てが変わったのハ。

藤林という名を捨て缶けり親父に拾われたその日からオイラは変わった。

オイラの世界は変わった。

オイラはただの鼠として生きる。

この腐った世の中を汚れながらも這いずりながら生きていく。

例え一人になろうトモ……

◇

ザアザアと雨が降る常闇が支配する森の中、天然パーマの男、銀時は着いた返り血が雨粒で洗い流されていくのを感じながら一人走っていた。

「はあ、はあ…… くそ！ ツラの野郎どこ行った！」

銀時は腕を苦悶の表情を浮かべながら腕を抑え木々に囲まれた森を駆け抜ける。

カチャカチャと音をたてる血まみれの鎧を見るに銀時は決して堅気の人間とは言えない。

攘夷戦争―― 宇宙から現れた天人呼ばれる者達の身勝手な政権に業を煮やした侍達が起こした戦争。

銀時戦争に身を投じた男。

今現在こうして一人で森を走っている理由もその戦争からだ。

攘夷を振りかざす侍達をはいすべく天人達は軍隊を銀時達へと向かわせた。

兵力はあまりにも差があり、銀時は桂と共に仲間達を逃すため囷の役目を担ったのだ。

死を覚悟していたが銀時達は何とも天人の軍勢を駆け抜け、森へと逃げ込んだ。

しかしその途中、突然桂が、

「ぬおおおー！ 腹がああああ!! うんまい棒食いすぎたかあ!!」

と喚きだし腹を抑えながら銀時の事なの忘れ何処かへと消えてしまった。

というわけで銀時は今一人なのである。

桂の強さをしる銀時はあまり心配はしていない。

むしろ今は自身の身の安全を確保しなければならない。

「とにかく雨を凌ぐ場所見つけねーとな」

銀時がそう呟いたからか、いやただの偶然ではあろうが木々を抜けた先に古びた寺が見えた。

これで雨を凌ぐと共に体力の回復も担えると思った銀時は、

「お邪魔しますよっーと」

と 一応は挨拶をして中へと入る。

すると寺の古びた空気が一気に鼻孔を擦ってきた。

雨と年代からか多大な湿り気を感じ、中は思っていた以上に暗い。

外の月明かりがましと思えるレベルだ。

ギジギシという響く音を足元から聞きながら奥へと歩いていく。

そーいやこーいうところってかなり不吉だよな…… いや、全然怖く

ねーけどね!

銀時は白夜叉などと恐れられてはいるが幽霊と言った目で認識出来ないようなものは極端に怖がる。

あまりの恐怖から気を紛らわすため銀時は目を閉じ深く深呼吸をする。

そして目を開くと、

「おい、お前」

銀時の目の前にフードを着込んだ女が現れた。

「ぎゃあああ!! ごめんなさいー! ごめんなさい! 勝手に入ってまじ

すんません! 悪気はないんですう! だから成仏してください!

なんなら俺が直ぐにでも消えますから!」

この暗がりと先程までの恐怖心が掛け合わさり銀時は女を完全に幽霊と勘違いし、土下座を始める。

すると女は突然謝りだした銀時に不思議に思いながら口を開いた、

「なに、とんちんかんな事言ってるんだ？ 成仏もなにもオイラは人間だ、人間」

「え……」

ゆつくりと顔を上げてよく見ると確かに足はある。

暗くてよく見えねーが。

銀時は自分が人間を相手にビビりまくって土下座をしたことを理解し咄嗟に訳の解らない言い訳を放った。

「な、なんだよ、驚かせやがって。いや、全然ビビってなかったけどねー。これはちよつとしたサプライズ的なやつだから、うん」

これも自尊心を守る防衛本能なのだろう。

しかし女はそんなこと気にもせず、

「何がサプライズだよ。お前、幽霊とか怖いんだロ」

「ああ!? 何言ってるの？ 俺全然怖くねーし！ 幽霊なんて俺のジャンボリックマグナムを一発……」

「お、幽霊」

「ひよほおお!! 南無阿弥陀仏！ 悪霊退散！」

手を合わせながら土下座をすると、甲高い笑い声が寺内に響く。

「ニヤハハハハ!! やっぱり怖いんじゃないカ」

腹を抑えながら笑いだす女に銀時はようやく騙された事に気づき指を突きつけギャーギャーと喚きだした。

「おまつ！ 人をおちよくってそんなに楽しいか！ いったくけどビビってるねーから！ 今のは驚いただけだ！ 驚くとビビるは全然違うからね！」

それを見ると女はよりいっそう楽しそうにクスクスと笑う。

「そうカそうカ。驚いただけカ、いや、悪かったヨ。オイラは只お前が何者なのか聞きたくてサ」

女はそう言うのと胡座をかいて床に座り込む。

とても女とは思えない話し方と行動から銀時はこいつ男か？ と

一瞬勘違いをしてしまう。

そんな事は霧知らず女は何処か楽しそうに銀時を見つめ何者なのかを問う。

「俺か？ 俺はさむ…… サムです」

一瞬銀時は侍と言おうとしたが考えてみれば侍は今や天下の大罪人。

つまり侍と知られば幕府軍に通報される、さらに言えば彼女が幕府側の人間という可能性もあるのだ。

銀時は苦しまぎれに咄嗟に浮かんだ、というか言いかけた、さむの部分から外人の名を言った。

「いや、嘘つくナ。お前侍だロ」

しかし女には通じなかったな。

当然だろう。

「げえ!?.. なんてわかった!」

「そんなもん、お前から漂う多数の強者の血液の臭い、その格好、様子からいただい検討ツク。オイラが知りたいのはお前がオイラに危害を加えないような奴かどうかダ」

「…… えーと、俺はまあ、襲う気はないけど……」

銀時は少々、いやかなりだらしない所があるかま決して人の道理から外れた事はしない。

その言葉は真実だ。

「ふーん、じゃあいいヤ。しばらくは二人でここで休んでようぜ」

女は気持ち良さそうに伸びをすると仰向けに寝そべる。

いくらなんでも出会ったばかりの男を目の前にして無防備すぎると銀時は思う。

それと同時に女がそれほどの余裕を持つ強者である可能性を感じた。

大体こんな所に女一人いること自体おかしい。

こいつは何者なんだと銀時が怪しく思っていると女は突然バツと

起き上がり、暗闇の中を勢いよく後ろへと跳ねながら退いた。

「ど、どうした？」

「…… っち、来やがった」

女が睨む先の扉がギリギリと音をたて黒色の服に身を包み込んだ筋肉質な男が現れた。

筋肉質な男は女を見つけると懐から先端が尖った鉄の武器、クナイを取り出した。

「見つけたぞ…… 下手な真似はせず、さっさと降伏して俺と共に来い」

低くくぐもった声で忠告する男に女はべっーと舌を出し、

「いやだネ、バーカー」

と言った。その瞬間男からクナイが放たれた。

女のいやだネというのが戦闘の合図と受け取ったのだろう。

クナイをひらりとかわした女に拳を振り上げ一気に間合いをつめてくる。

しかし女は臆することもなくその拳もかわすと男から再び距離を離した。

この時、銀時は、

え？ なにこの状況？ 俺一応主人公なのになんか置いてけぼりなんすけど？

と完全に混乱しきっている。

そんな銀時には目もくれず男は執拗に女を追いかける。

ただでさえ古びて壊れやすい寺の中は、所々からバキツなどという破壊音が響く。

最初はまるで兎のようにピョンピョン跳ね回り男の攻撃をかわしていたが床へと着地すると足を痛めているのか苦痛に顔を歪ませる。

「つつ……」

思わずよろけてしまう隙を男は見逃さない。

女の頭上へと飛び上がるとクナイを振りかざしそのまま突き刺さるー

ガキンっ！

ことはなかった。

「危ね〜」

銀時はたった今仕留められそうになった女を助けるため抜いた刀で受け止めたのだ。

「……なんだお前は？」

女の事しか眼中になかった男は突然攻撃を妨害した銀時に驚き目を丸くした。

「ただのジャンプ愛好家だよ！」

銀時はそれだけ言う足で男のみぞおちを足で蹴り飛ばした。

「ぐっ……」

仰向けに男が倒れると銀時は女の小さな手を握りしめ寺の扉をを刀で壊しながら無理矢理飛び出る。

「な、お、お前！」

女は突然の事に声を上げるが、銀時は構わず手を引っ張り今だ降り続ける雨の中を走っていく。

「なんだかよくわかかわねーけど、女一人放つといてられねーだろ！ さっさと逃げんぞ！」

「…… わかつタ」

女は肌寒さを感じながらも銀時が握しめる手の温もりに微かに酔いしれていた。

この出会いが新たな人生の始まりとなることに彼女はまだ知らない。